

## 金春禪竹(氏信)の著作集の検討

世阿弥の著作との関係を踏まえながら

### 目次

一、「五音次第」	享徳4年(1455年)初秋吉日	50歳の禪竹	1頁
二、「歌舞髓脳記」	康正2年(1456年)正月吉日	51歳の禪竹、安照	2～11頁
三、「六輪一露之記」	康正元年(1455年)の頃	50歳～62歳の禪竹	11～13頁
四、「拾玉得花」	康正2年(1456年)9月2日	51歳の禪竹	13～16頁
五、「五音三曲集」	寛正元年(1460年)の頃	55歳の頃の禪竹	16～32頁
六、「至道要抄」	応仁元年(1467年)の頃	62歳の頃の禪竹	32～37頁

### 一、「五音次第」

「五音次第」は世阿弥の著作では「五音曲条々」や「五音」に対応していると考えられる禪竹の伝書で、世阿弥とは違った語りで「祝言」「幽曲(幽玄)」「恋慕」「哀傷」「闌曲」について説明し、さらに章句を引いたものであり、「調子」や「息」、「序破急」、「横」・「豎」、「若聲」・「感聲」・「老聲」、「皮・肉・骨」など詳しく分類された音曲に関する論と「六輪」に関して定義がある。

この点、「皮・肉・骨」のことにに関して世阿弥論では「至花道」の中で能の芸態(ゆきかた)として「皮・肉・骨のこと」が述べられていた。

骨とは、生まれつき素質がありしぜんと上手になるよう恵まれた素晴らしい力が芸にあらわれることであり、肉とは、舞や謡の修行による力量がそっくり演技にあらわれた境地のことを言うのである。

そして皮とは、これらの点を成長させて安き位にいたり、優雅な美を極めた姿をいうのである。

「六輪」とは「壽輪」息の曲位、舞の序であり、「豎輪」澄上曲位、舞の感であり「住輪」字の治まる曲位であり、舞の落居のことである。

また「像輪」其體其體の曲位、舞の品々であり、「破論」は闌曲の位、舞の如意體であり、「空輪」は無上々の曲位、舞の無心のことである。

奥の一露は曲位の精心である。

「祝言」とは、すぐに正しき位のこと、松の木のごとしである。

「幽玄」とは、祝言にうらうらなる懸を添えたるもので、櫻木のごとしである。

「恋慕」とは幽曲に哀をそえたもので、紅葉のごとしである。

「哀傷」とは無上音で、恋慕に亡憶の懸かりをそえたもので、枯木のごとくである。

「闌曲」とは、真実は一人音曲であって、杉木のごとしである。

## 二、「歌舞髓脳記」

「歌舞髓脳記」は世阿弥の著作では「九位次第」や「五音」に対応していると考えられ、その冒頭では晩年の世阿弥や元雅のことも記されており世阿弥の著作では晩年の「却来花」や「夢跡一紙」との対応関係も考えられる。

歌や舞いを習うことは能楽の道において極めて重要なことであるが、天の岩戸神話にも言及しつつ歌や舞いの重要性を説き、いかにして能の骨格を作っていくか述べている。この点、天の岩戸神話のところは、世阿弥論との関係では「風姿花伝」「第四、神儀伝」とのつながりもあるのではないかと思われる。また世阿弥の「五音」における能の曲の分類が「歌舞髓脳記」の中でさらに展開されており、それぞれの曲風と體やかかりなどについても個別具体的に整理されている。

それ申樂家風の道者は、世上異端のもてあそびにあらず。

こころ(心)をし(知)れば、浅に似てふかく(深く)、近きに似てとほし(遠し)。

そのはじめ(初め)を思へば、神代よりおこりて(起こりて)佛在世にうつり(移り)、人の世につたはれり(伝われり)。これ則ち、神樂のはじめ、歌舞詠曲の根源たり。

そのかみ(神)、天の岩戸にして八百萬神達、神樂を奏したまひしにかたじけなくも、天照大神みことのりして、おほきなかに(多き中に)、天兒屋根にのたまふ(宣)より、こころ(心)たえにして(妙にして)、言うるわしき(麗しき)はなしとて、手力雄の尊にいほと(岩戸)をひらかせ(開かせ)いでませしより(出在しより)、一陰一陽、一言萬物のはじめ(初め)たり。遥かにその心を拝しおもん(慮)みれば、とこやみ(常闇)なりし天の下、ほのほのと明そめける(初めける)妙心、おもしろ(面白)のさかひ、言語道断、不思議、心行所滅の感心、此のときにあり。

然らば(しからば)この境界に心を染め、歌舞幽情の曲味を作り、意中景(いちゅうのけい)、意中の意として、神明佛陀に法樂せしめば、誠是(まことこれ)、狂言綺語も讚佛轉(転)法輪の因(なやみ)と成て、和光同塵の結縁、八相成道の利物(りもつ)たらんこと、疑いあらんものか。

それ情(せい、美しい様のこと)是を思うに、歌はこの道の命なり。その身をうくることは皆前世の戒體なれば、その道に生まれるもの、誰とても全く道の他に身心あることなし。この義理を知らざる者、みな天道にそむくと見えたり。されば身はこれ道なり。道はこれ身なり。

この神樂の家風においては歌道をもって道とす、歌また舞いなり。これ歌舞。また一心なり。形なき舞いは歌、詞なき歌は舞いなり。

然のみならず、心にあるを志と言ひ詞に出るを詩という。

その言葉やまず(止まず)して詠吟にあらわるる(現るる)を、手の舞、足の踏みどころを知らずといえり。かれこれ思うに、歌舞一心の曲味なり。

この心を悟り、この位をわきまえ知らんものは歌道を尊ぶべし。  
及ばぬ歌をひとえによみならへ(読み習え)とにはあらず(非ず)。  
古歌に心を染めよとなり。しからば(然)詠曲して舞い謡うこと、無上幽情の感などかな  
からん。おそらくは、この心を悟り知らんことを、ただただ心深く、姿幽玄にして、詞  
卑しからざらんを上果の位とす。故に、古歌ならびに詩を少々苦吟して、その心を曲體  
の骨味とし、風姿の品を分かちて、上類の能體をえらぶ。かくのごとく愚かなる心に、  
詩歌の道まで知れるがように書き集め申す人は、空おそろしく、落ちることあらば、外  
見憚りあれども、筋も無く、道もなく、俗にのみなりゆくことを嘆く心にまかせ古の畏  
き跡を写しもて記しておく。道の心さしばかりなり。  
ただし、先達の曲味をなめ、常々名匠の心、詞を伺いて、私なければ、さすがにこの道  
においては、骨肉髓脳にこそはと覚ゆ。  
入りては幽玄のそこにてつし(底に徹し)、出では解脱の門にあそびて(遊びて)、月影花  
匂(つきのかげはなのほひ)の名残を惜て、あらく(粗く)こはからじとのいましめ(誠)  
とせり。ただ、神慮(じんりょ)にいのり(祈り)たてまつるころ(心)ばかりなり。

## 第一 老體

これはまね(真似)の本風、老、女、軍の三體において一番なり。

歌舞二曲の本體なり、総じて老身の心、皆歌の心なるべし。

とし(年)ふればよはひ(齡)はおいぬ(老いぬ)しかはあれど

花をし見ればものおもひ(物思)もなし。

**老松** 妙花風 この姿 餘に混せずして大なるかかり(懸かり)心、氣色添へり。  
梅の花それとも見えずひさかたの あま(天)きる雪の並べて降れば。

**相生松** 正花風 この姿 松木の體をなす。  
住吉の松を秋風吹くからに  
こえうち添ふる興津しら波。  
また、長高く、遠白き體にもあるか。  
天の戸をおし明けがたの雲間より 神代の月の影にのこれる。

**西行桜** 閑花風 面影のこるもの、はかなく、やさしき體  
散まよふ(迷う)木のもと(と)ながらまどろめば  
さくら(櫻)にむすぶ春の夜のゆめ(夢)

**吉野西行** 妙花風 しづかなるかかりにて、しかも又散乱れこまやかなり。  
立出て妻木を伐りしかたをかの ふかきやまじとなりけるかな。  
この體、又老いて幼き心あり、  
兒のたこたこあよみ(歩)したるがやうなり。  
鶯よなどさは鳴くぞ乳やほしき こなへやほしき母や戀(恋)しき

**雲林院** 閑花風 至極體か、物の極まれる心。

日暮れば(くるれば)逢ふ人もなし眞木立る。  
峯のあらし(嵐)の音斗(ばかり)して。

## 第二 軍體

この姿みなこの心なるべし。

もののふの矢なみつくろうこ手のうえに あられた走る那須の篠原

### 源三位頼政(よひまさ) 寵深花風 抜群體

物の中に抜けいでたる姿 としへたる宇治の橋守事問わん  
いく代になりぬ水のみなかみ。  
またほのかなる姿 幽玄にもかなう。  
有明のつれなく見えし別れより 暁ばかり憂きものはなし。  
埋もれ木の花咲くことはなかりしに身の化る(なる)はてぞ哀しかりける。  
これ本意なるべし。

### 越前三位通盛(みちもり) 正花風 存直體

心ざし有りて、又直なる道を存する心。  
夕ざれば門田の稲穂おとずれて葦の丸(まる)屋に秋かぜぞふく。

### 薩摩守忠度(ただのり) 寵深花風 幽玄之體なり。

侘びぬれば今はた同じ難波なる 身をつくしてもあわんとぞ思う。  
行くれて木のしたかけを宿とすれば 花や今夜の主ならまし。  
優しく本意これのごとし。

### 齋藤別當眞盛(さねもり) 広精風

この心、花より麗しきなり。  
忘るなよ程は雲居に成りぬとも空行月のめぐりあふまで。

### 大夫臣朝長(ともなが) 広精風 澄海體

この心海のごとし。  
何となく聞けば涙ぞこぼれける 苔の袂に通ふ松風。

### 左中将清経(きよつね) 浅文風

細やかなる姿あり。散らすなよしのの葉草のかりにても  
露かかるべき袖のうへかは。

## 第三 女體

これは天女がかり、この姿、皆この心。  
あまつ(天つ)かぜ雲のかよひぢ吹とぢよ(閉じよ)  
乙女のすがたしばしとどめむ。

### 佐保山 寵深花風

にほひ(匂い)あるすがた。

後もうし。昔もつらし(酷し)さくら花  
うつろふ空の春の山風。

**箱崎松** 浅文風

これは神女のかかり、幽玄の方は心おくれ(後れ)したるやう也、物ぼそく(細く)見ざめ(醒め)せぬ姿、行の體か。  
夕つくよ(月夜)鹽(しお)みちくらし難波江の あしの若菜をこゆる(超る)し  
らなみ。

**鶺鴒羽** 正花風

これは龍女がかり、一ふし(節)あるさま也。  
立かへりまたもきて見ん松しまや をしま(雄島)のとまや(苦屋)波にあらす  
な(荒すな)

**熊野** 籠深花風

是よりは、つね(常)の女がかり品々ありといへども、ただ上類の心姿なるべし。  
ことにこの風姿、春の明ぼののごとし。  
眞木の戸は軒端の花のかげなれや ともまくら(枕)も春の明ぼの。  
又、心底切なるところ、強(強)力體か。  
長木とたつ(立つ)しらなみ(白波)と焼しほ(焼く塩)と いづれかから木わた  
つみ(渡海)のそこ(底)。

**松風村雨** 籠深花風

この心姿、秋の夕ぐれのごとし。  
もしほくむ海士(あま)のとま屋のしるべかは  
うら(浦)みて(見て)ぞふく秋のはつ(初)かぜ。  
又、この心、鬼拉ぐとも云つべし。  
神風や伊勢のはま(濱)萩折しきて  
たびね(旅寝やすらんあらき(荒き)はまべに。)  
かれこれ、此二の體ぞ能の本意無上なるべき。  
朝に行雲となり夕には行雨となりけん面影もうかぶ(浮かぶ)やふ(様)也。  
幽玄の位、猶ふかだち(深立)て心ざし深切(しんせつ)のところなり。  
惣持て、女によそほひ(装い)、おもむるにして(ゆっくりと静かな動きのこと)、  
だいたいたたぬる(立たぬる)などいへる(云える)。  
および(及び)なき宮女、殿中の御おもむき(趣)をおもひ(思い)、おも(面)ちか  
かにして(近にして)、しかもなつかしくして、物はかなかるべしとやらん。春の  
明ぼの、秋の夕ぐれに、事つきぬべし。

**井筒女** 閑花風

このすがた事に然るべき身也。

ただし、月のこ(木)かくれなる(隠れなる)所あるか。  
かぎり(限り)あればけふ(今日)ぬきすてつ(捨てつ)藤衣 はて(終て)なきもの  
はなみだ(涙)なりけり。

**江口女 閑花風**

幽玄のうちに取ても、さのみはのぼらざる(上らざる)位。  
世の中はなににたとへん(例えん)朝ぼらけ こぎ行く舟のあと(跡)のしらなみ。

**求塚 広精風**

この姿、こまやか(細)なる體也。ふか立ぬれば俗になる所を知るべし。  
ただ幽玄の細やか也。  
ながめ(眺め)わびぬ(詫びぬ)秋より外の宿もがな 野にも山にも月やすむ(澄む)  
らん。

**礎(きぬた)女 寵深花風 (世阿弥作の「砦」か?)**

この姿恋慕にみだる(乱る)心よし、かかり(懸)幽(かすか)に、ほのかなり。  
人はこで(来で)かぜ(風)のけしき(景色)もふけぬ(深)にあはれに鴈(がん)のをと  
(音)づれてゆく(行く)

**静 正花風**

見るやうなる(様なる)かかり也。  
村雨の露もまだひぬ(乾)槿のは(葉)に 霧たちのぼる秋のゆふぐれ。

**山うば(姥) 正花風**

このころ、至極體か。  
山さと(里)は世のうき(憂き)よりも住わびぬ  
こと(事)のほか(他)なる峯のあらしに  
又この山うばの本意、おそろしく(恐ろしく)、物すさまじき(凄)ころかと思へば、  
憂いある所まじわりて(交)、をさなき態(しわざ)あるか。  
このころは木々の梢も紅葉して鹿こそはなけ(鳴け)秋のざと(里)。

**小野小町 妙花風**

古をうつす心 津の國ながら橋は跡もなし わが老のすゑ(末)のかからずもかな。

**三井寺 正花風 景曲體**

などいふべきや。  
みせばやなしが(志賀)のからさき(辛崎)ふもと(麓)なるながら(長柄)の山の春の  
けしき(景色)を。

**箱崎 広精風 物哀れなる體**

小篠原風まつ(待つ)露の消えやらで この一ふし(節)をおもひ(思い)おくかな。

**花形見 浅文風 幽玄のかかり**

おもひ(思い)河たえず(絶えず)ながる(流る)水のあは(泡)の

うたかた(空形)人にあはで(逢わで)きえ(消え)めや。

百萬 寵深花風 理世體か

山寺の入相の鐘の声ごとにけふ(今日)もくれぬ(暮れぬ)ときく(聞く)ぞかなしき(悲しき)。

班女 広精風 麗體

おもひ(思い)かねいも(妹)がりゆ(行)けば冬の夜の 川かぜ(風)さむみ(寒み)千とり(鳥)鳴なり。

隅田川 浅文風 撫民體(ぶみんたい)

ものおもふ袖より露やならひ(習い)けん 秋風ふけばたえぬ(絶えぬ)ものとは。  
これ又、亡魂の心、餘にこんせぬ(混せぬ)餘情あり、瑞風これにあり。  
あさぢふ(浅芽生)や袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢をふ(吹)く嵐かな。

桧垣女 妙花風 強力體

ねやのうへにかた枝さしおほひ外面なる  
葉ひろかし(廣)はにあられ(霰)ふる(降る)なり

浮船 寵深花風 理世體

ながらへば(永)まだこの比(頃)やしのばれん(忍)  
うし(憂し)とみしよ(世)ぞいまは恋しき。

#### 第四 雜體(雜體)

都べはなべてにしき(錦)と成りにけり さくらを折らぬ人しなれば

丹後物狂 正花風 秀逸のかかり

むさしの葉ゆけども(行)あきの(秋)はてぞなき  
いかなる風のすゑ(末)にふく(吹く)らむ。

又、この風姿、しほるところ(萎)、あはれ(哀)なる感あり。

これ誠瑞力なるべし。花よりも猶うへの(上)事と見えたり。

旅ころも(衣)立暁のわかれ(別)よりしほれしはてや宮城野の露。

蘆(芦)刈 浅文風 有心體

つのくにの難波の春は夢なれや 芦の枯葉に風わたるなり。

錦木 広精風 遠白體

岡の邊の里のあるじ(主)をたづぬれば 人はこたへ(答へ)ず山おろしのかぜ

邯鄲 妙花風 高山のごとし

世をそむく(背く)山のみなみ(南)の松かぜに  
こけ(苔)のころも(衣)や夜さむ(寒)なるらん。

鶉飼 正花風 古體

秋くれば朝げの風の手をさむみ 山田のひた(引板)をまかせて(任せて)ぞきく(聞)。

通小町 妙花風 高山體

吹はらふあらしの後の高嶺より 木はくもらで(曇)月や出らん。

**船橋** 正花風 至極體

さかの(嵯峨の)山千代のふるみち(古路、平安京と嵯峨方面を結ぶ小道)跡とめて  
また露わ(分)くるもちつき(望月)の駒

**戀(恋)重荷** 正花風 花麗體

うづら(鶉)なくまの(眞野)の入江のはま風に尾花なみ(浪)よる秋の夕ぐれ。

**太山府君** 寵深花風 幽玄體 (世阿弥の「泰山府君」のことか?)

又、これにあり。

こぎまざる柳のいと(糸)もむす(結)ぼほれ 乱れてにほう(匂)花さくらかな。

**自然居士** 浅文風 事然るべきかかり

いそがれぬ(急)年のくれ(暮)こそあはれなれ むかしはよそ(外)にききし(聞)春かは。

この風、又、態はをさなく(幼)、しかも花にて、心は寛也。

たとへば、その心あまりて、こと葉たらざるがごとし。

ねぬる(寝)夜の夢をはかなみまどろめば いやはかなにもなりまさるかな。

**俊寛僧都** 閑花風 不明(ふびん)體

ながむれば我山のは(端)に雪しろし 都の人よあはれともみ(見)よ

**歌占** 強細風 古をうつすかかり

君こん(来)といひし夜ごとに過ぎぬれば たのまぬものまちつつ(待)ぞふる(経)

又、この心か。

はこねぢ(箱根路)を我こえくればいづ(伊豆)のうみ(海)や沖の小島に浪のよる見ゆ。

**王照君** 閑花風 麗體

山人の折袖にほふ(匂)きくの(菊)露 うち(打)はらふにも千世はへぬ(経)べし。

又、この心。

みち(路)のへの野はらの柳もえにけり あはれむかしの煙くらべや。

この風姿、殊に祖父曲の一流を残す、一姿一言一踏の妙所あり。

**蟻通** 妙花風 鬼拉體

閑曲の位、誠餘情忘る所也。

ぬれて(濡)ほす(干)玉くしの齒の露霜に 天てるひかり(光)いくよへぬらん。

**鹽(塩)竈** 寵深花風 強力體

いもに戀(恋) 吾(あが)の松原みわたせば

しほひのひかた(潮干の潟に)にたづ(鶴)なきわたる。

大方は、上三體よりはじめて(初)雜體に至るまで、これら皆本風有道にして、俗をわすれたる(忘)姿也。或いは親子のあはれ、或いは武士の義理、因縁能などを、道しらぬ(知)人は最上とす。只おほくは俗なる體のみ也。但、俗にあらき(粗)風どもも、上士の心得てなすときは、中々興もあるか。又、その手には、かなわず(敵わず)とみる(見る)愚見もあるべし。

見るめかり(布菀)の海士の風體は、俗に似て、又、ひいでたる所ある哉。祖父骨風の妙所

あれども、今日は深淵にのぞみて(臨)、水底の玉をとらんがごとし。もし此心に至らん事あらば、幽玄にもかなふべき(合)能體なるべし。

枯野うづむ(埋)雪にこころをしかすれば(敷)

あたりのはら(原)にきじ(雉子)なく(鳴く)なり

この心にや、かなふべき。

観世入道世阿弥随佛、いにしへ名をうるたくひ(類)、幽にやさしかりし人體の眞曲を、たとへおく詞に云。

第観世世阿が父にいふ藝能の位、山河をくつす(崩す)いきおひ(勢い)ありしなり、あらく(粗く)こはき(強き)にはあらず、ただ和用をほとこしける(施しける)なり。

また夏の日のてれるがごとしといへり。此位、もしこの歌に哉かなふべき。

ゆきなやむ牛の歩みに立ちりの風さへあつき(熱)夏の小車 藤原定家

又、花にとれば、名木の花のさかりを見るがごとしといへり。

又、此位、

花さかり霞の衣ほころびてみねしろたへの(白妙の)天のかぐやま(香山)。

祖父長権守はくるへる(狂)松の苔むす枝に、霜のをけるがごとしといへり。

此位、興津風吹きにけらしな住吉よし(吉)の 松のしつえを(下枝)あらふ(洗)しらなみ。

此歌のたとへにしるしおかるる言葉に「昔唐人のよしある松のもと(下)、から(唐)皮しき(敷)、ぼうし(帽子)ひかつき、琴をしやりつつ、つえつき、うそふきみたる。」よし和歌の秘書にみ(見)えたり。

又、花にたとへば、八重、紅梅のさかりを見るがごとしといへり。

君なら出たれにかみせん梅の花 色をも香りをもしる人ぞしる。

犬王大夫、是は江州のものなれども、そのものの位は、変わるべからず。

然らばその詞にも、幽にやさしくして、更に俗を知らざりしものなりといへり。

ことにさざめきかけて、物はかなく、とぢめなく(閉)、大にほひ(匂い)かげ(影)ありける也。此位やかなふべき、

見わたせば柳櫻をこぎまぜて 都は春のにしきなりけり。

このごとく申しおきける。

世阿入道、智と作と成所と、いづれも無上の位なりし也、明ぼのの花に、月の残れるがごとし。

山のはを分けてながむる春の夜も 花のゆかりの有明の月。

花のか(香)のかすめる月にあこがれて 夢もさだかに見えぬころかな。

観世十郎、遠山に、かすめる花のごとしといへり。

足引きの山のはごと(葉毎)にさく花の にほひにかすむ春の明ぼの。

当時の體、分明也。千聞一見にしかざれば記さず。歌舞をなす位に於いて、品をわか(分)かつに二あり、心詞幽にして、させるふし(節)も見えざれども、曲味そへる。此位、

逢坂の関の清水にかけ見えて いまや引くらむ望月の駒(紀貫之)

二にはたくみにして(巧)、俗ながら、興あるかた

逢坂の関の岩かどふみならし 山たち(立)いづるきりはら(霧原)の駒(藤原高遠)

この二の歌の位、はじめの歌の心詞幽なるかたは、参四へん吟すれば、させるふしみ(節見)えざれども、藪遍におよべば、形も匂いもそふ也。次の歌は二三銀は興ある様なれども、藪へんになれば見ざめ(醒)する也。和歌の書にも書かれたり。

まさしく、歌舞の圖(読みは「と」で意味は「図」)、此れにも是あり。

又、こう(功)なり名とげて、無上の位に、二あり。閑、これは閑けたる位に付きて、みやび(雅)しづかにて、妙なるかた。閑。是は又、月日年などのたけゆくころ(心)かれて(枯)、あれたる(荒)位也。此の二の所をしる(知る)べし。

しづかなる(閑)位には、

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ わがみ一つはもとの身にして。 在原業平

あれたるくらひには、

峯のあらし浦の浪風雲塞(さえて) 皆しろたへの秋の夜の月。

此のあれたる位に付て、心うつし(移)おなじ(同)やう(様)なれども、あれたるとあらきとは、心かはるべし。至極無上の眞曲に至て、わざと荒れたる風體は妙也、根本あらき物は、ただあらきのみなり。根本閑静かなるところより、かりにあれたるは、しづかなるよりも、又感あり。性海、風無うして、金浪をのづから涌くといへり。

根本麁きが、しづかなるは、しづ(沈)まる也。閑にはあらず。

あらき海きびしき山のなかなれどたへなる(妙なる)こゑは(聲)はへだてざりけり(隔)。

(藤原俊成)

是は根本、静也。妙音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音。

人もかよはぬ(通)沖津しほ(汐)あみのあかつきの聲、身にしられて哀也。幽なる所より、わざとあれたる位、無上妙果、眞曲の所催也。此麁妙のしな(品)をわきまふべし。

又、餘情、ことはり(理)、ともに(共)しられて(知)、哀に幽なるすがた(姿)、一。

あはれいかに草葉の露のこぼるらん 秋風たちぬ宮城野のはら(原) (西行)

又、なにのことはり(理)もしられずして、心すがたはかなく、にほひ(匂)ふり(振り)かげのそふすがた一。

我戀は庭のむら萩うらかれて(枯) 人をも身をも秋の夕ぐれ(暮)。(前大僧正慈円)

又一、うつり(移り)あへぬ花の千草にみだれつつ、かぜのうへなる宮城野の露。(頓阿)

凡此一帖者、師説を得て、其上に骨髓をくだきて(碎)、工夫公案の餘也。上代者、只神楽の古風をもて道とすといへども、六十番の用風をうつし(模)やはらげし(和)よりこのかた、花鳥風月のもてあそびとなり、花をかざし玉をみがく風流にいたりては、鹿苑院殿の御代より、ことさかりにして(盛)、和州江州の藝人、あまねく御覧しわかち、強俗をしりぞけ(斥)幽玄をば請じ、諸家の名巧、善悪の御批判、分明仰出されしより、道の筋目しなじな位位をわきまへ、古きを尋、あたらしき(新)をしり(知)、えらび(選) 定置かれしかば、藝道に於いて更に私なき物也。

雖然、上士は道を聞てつとめ(勉)まなび、中士は道を聞きてそんせる(損せる)がごとくはうせる(失せる)がごとく、下士は道を聞きて手をうちて(打ちて)大いにわらふ(笑う)。わらはれず(笑われず)は、もって(以て)みちにあるべからずといへり。

ただ、下士のわらひをば得るとも、道のみちたる心、わたくしなくば、まことに冥見にそなはり(備)、貴人高位の御目にも、などか(何)およぼさ(及ぼさ)ざらん。曾て自由私の心あるべからず。然(さる)即一指の舞袖、一音の曲位、一踏の足音まで、皆幽究之心を含で、餘情風流をなさん事、愚かなるべからず。

強、俗、雑の風姿、口身、力動音勢、昔は更にさた(沙汰)なかりし事なり。

源氏の心にも、上果の位は、伶人はかせ(博士)の古様なるよりも、雲の上人の興に乗じ、舞踏し給うらん。青海波とかや、紅葉のかげ(陰)より舞出で給ひけん、光もにほひ(匂い)もふかからん(深)くらい(位)、げにおよびなくとも(及)心にそめたらんや(染め)、此道の思出たらん、此の心よく悟りし(知)らん事、ありがたくや(有難く)、古様新曲の位、風道の灌頂(かんじょう、菩薩が仏になる時に諸仏が頭に水を注ぎ、仏の位に達したことを証明する密教における儀式)なるべきか。

かくのごときはをこがましくも申せども、身の上にて成ては、つたなき事おほし(多し)。

但し、知れるとはしれりとせよ、しらざるはしらずとらよとなり。しからば、さる事もさとりし事、又する事のかたきにあらざるぶんざい(分際)にてやあるべき。

さりながら、下手なる事の用に立位もあるか、返す返す此の事ども、憚りあれど、いくほどもなき老の身に、ききなれたる(聞き慣れ)たる道の大事、せめてもの心ゆかしに(行)、くちに(口に)まかせて悪筆を染る所也。

眞如実相の妙法をだに、わらふ(笑う)て(手)にて書くためしなれば、此體にても事足りぬべし。此心をえらび(選び)おかんとて(置)、そくぼくの老心をいたましむる(傷ましむる)事、外見もし(若し)あらば(有らば)、かたはら(傍ら)いたく(痛く)存すれども、記置事、道を思うばかりなり。仍(なお)歌舞髓腦の記と名付也。禅竹翁。

康正貳(二)(1457年)年正月吉日 竹田金春氏信(花押)

### 三、「六輪一露之記 一大事秘書也」

禅竹によって当初に「六輪一露之記」が著された時、此一冊は、一露之記、六輪秘注の両書を合巻したる書であった。本書は、たいてい、康正のころの原撰と想われる中に文正元年の和歌、ならびに応仁元年稻荷山参籠の二章を混じたものであった。

参考にしている『禅竹集』では、その二章を割きて、別に禅竹文正応仁記と題する一冊となし、以て混雑を正している。

#### 第一章 戒壇院司志玉内典論

六輪一露の私詞。それ申樂家業の道者、體美盡(つくし)、聲文を成す、是以て手の舞、足の踏む所を知らざる也。然即、豈本来無主無物之妙用に非ずや。故假(仮に)六輪一露之形を得る。一日壽輪、二日堅輪、三日住輪、四日像輪、五日破輪、六日空輪、一露者無上之位之重位也。

第一壽輪、歌舞幽玄之根源、見風聞曲而感成之器也。

内典においても又、密教の心は六大法性の建立に当たる、顕宗の心は眞如隋縁の萬法、流轉(転)還滅の終始、今此れ六位に窮(きわま)れり。

初後の二位は、眞空無相の根源、中間の四位は、生住異滅の四相なり。

第一、壽輪 第一は無相空寂の位分、動静一源の妙體なり。法性本空寂なり、取るもなく亦見るも無し。の華嚴經の文。阿字は第一の命、情と非常とに還すの大日經の説、佛法の壽命、只此の一位なり。

第二、堅輪 第二は生の位なり、則ち無相空寂の性海より、有爲轉變の一波を起せり。性海無風、金波自湧の棗柏大士の解釋、此旨を顕せり。

私詞 第二堅輪は此立上現、精神と成て、横堅顕れ、清曲生ず、是則、無上々果の感主たり。

第三、住輪 第三は住の位、色心の萬法、隋縁流動して、生死涅槃爰に顕れ、流轉還滅極無し。是則、法爾自然、法然安住の覺位なり。「是法住法位、世間相常住」の法華經の文。「妄盡必澄、萬像齋現」の賢首大師の解釋、此趣を述べ給へり。

私、第三住輪は、短堅る所、諸體生前を成する安所也。

第四、像輪 第四は異の位、草木国土も皆唯識の所變なれば、一心轉變して、萬像歴然たり。法界の體性に差別なし、森羅万象即佛身なり、菩提の外に法有るを見ず。

「是の故に、我一切の塵を體す」の華嚴經の文、此意なり。

私 第四像輪は、天衆地類、森羅萬像、此輪に治まる。

第五、破輪 第五は滅の位、煩惱も即菩提と顕れ、生死も即涅槃に歸る。「三界は唯一心なり、心の外に別の法無し、心と佛と、及び衆生と、是三差別もなし」の華嚴經の文。

「阿鼻の依正は全く極聖の自身に處し、毘盧の身土は凡下の一念に肥えず」と云う、天台大師の解釋、此位に当たれり。「破和合識、滅相續心、顕現法身、智純淨故」の超信論の文、又此心なり。

私 第五破論は、天地十方、無盡異相の形を成すも、本来此輪中に生ず、然れども假(仮)に圓相(えんそう)を破するの儀を以ての故に、破論と名付也。

第六、空輪 第六、空輪は又最初無相の一理に歸す。

空々して跡を絶て、湛々として言を亡す。遣り遣りて重ねて遣る、遣るべき處有ること無し。又、空す、空すべき物を見ず。

私 第六輪は無主無色の位。向去却來して、又本(もと)の壽輪に歸す。

奥書の一露は、至極甚深の位なり。

雨露霜雪は皆消えて、只一露にまとまるが如し。

已上、六門の有相無相を共にはらふこと、劍の萬障を拂う(はらふ)に似たり。

されば、是を性劍とす。

「一切、善とも悪ともすべて思量すること莫れ(なかれ)」と、釈迦の説。

「尋思路絶、名言路断」の唯識論の文は、此旨を顕す。此妙理堅固不可動なる所を、不動王の利劍と云、此一心を文殊内證(証)の智劍と習い収む。

甚だ深々々、不可説々々々、只此の一劍なり。

私 此一露、空色の二見に落ちず、自在無碍にして、一塵もさわる事なし。

是則、性劍の形と成る。

#### 四、「拾玉得花」

「拾玉得花」は世阿弥から禅竹に相伝されたことが知られているが、禅竹は世阿弥の祝言・幽曲・戀慕・哀傷・闌曲という五音の分類にそれぞれの曲の曲味を象徴する和歌を引き、10體の設を立てたものである。

注目したいのは『世阿弥能楽論集』の「拾玉得花」(1428年)との関係であるが、『世阿弥能楽論集』に収録されている「拾玉得花」の冒頭に世阿弥の「拾曲得花」は書名のみが知られていて永らく実物は失われていたが昭和31年(1956年)に金春晃実(てるちか)氏が金春宗家に所蔵されていることを発見されたということや底本の金春宗家所蔵本は、慶長前後に金春大夫安照が次男に転写させたものが唯一であることや、底本には本文から奥書に至るまで朱で句読を施し、仮名を振り、漢字を宛て、行間や余白に注記を加えているなど仮名の付け方は世阿弥の読み癖と違うところもあるから禅竹あるいは後人の加えたものも混じているのではないかということであり、そうした観点からも両者を比較して読み返してみると新たな視点が得られるかもしれない。

##### 第一、祝言

此の曲の心は、たとえば年の始めの御慶、千喜萬悦(せんきばんえつ)と云うがごとく(如)なるべし。呂の聲を本に、律音を心得て、文字正しき、かかり(懸かり)幽なるべし。一曲安全にして、更によこしまなる(邪なる)心なし。此曲の味(あじわい)いたりては、五音始終の性(しょう)となる也。衆木(しゅうぼく)かれて、松にならんがごとし。

萬代を松にぞ君をいわひつる千歳の影にすまんと思へば 良岑のつねなり

##### 第二、幽玄曲

是は、かすかに(幽かに)ふかく(深く)、聲あや(文)をなし(作)て、色に染、香りにめづる(愛)たぐい(類)なり。しかれども、正しき性は、以前の祝言の下地にて、心をふかめ染むる也。假(例えば)、しろき(白)いとを(糸)五色に染めんがごとし。其心根と云うは、春の霞の隙に、色香のほころび、秋の露に千草のにほえる(匂)よう(様)に。幽(ゆう)にやさしき(優)、物ふかく(深)、しかも(而も)はかなき筋まじはるべし(交)。

ゆふにやさしからんとて、行末もなく、のぼめ(延)なやめば(悩)、更にきかれず(聞)。されば、是のみならず、諸曲の性、祝言の位をしらば(知)、よはき(弱)所あるべからず。

またや見んかた(交)野のみの(野)の櫻かり(狩り)花の雪ちる(散る)春の明ぼの(曙)

藤原俊成

古里はちる(散る)もみぢは(紅葉)にうづもれて軒のしのぶ(忍ぶ)に秋風ぞふく(吹く)

源俊頼

### 第三、戀慕曲

戀慕は幽玄をなお(猶)ふかむる(深むる)曲味(きょくみ)。

しのぶ(忍)れど色に出にけり我戀は物やおもふ(思う)と人のとふ(問う)まで

平兼盛

### 第四、哀傷曲

春の花も、秋のもみぢ(紅葉)も、皆ちりぢり(散り散り)になりはて・・るの山の風の  
色、すごき(凄き)木々の木ずゑ(梢)あさちが(浅茅ヶ)原のけしき(景色)見るがごとし。  
そめそめ(染)つる色をつくしはてて(果てて)ばうおく(亡憶)のかなしび(悲)の聲のみ  
也。餘情をわする(忘)心なるべし。このばうおく(と戀慕とのこわ(聲)懸、かわりめ  
だいじなるべし。

あさちふ(浅茅生)や袖にくちにし秋の詩もわすれぬ夢をとふ(問う)嵐かな

源通光

### 第五、闌曲

是れは闌たる位、あれたち(暴れ起ち)たれども、あまりにこん(混)せず。

又は、みやび(雅)、しづか(静)づかなる位もあり。眞實(眞実)には、ひとり(独)音曲  
なり。四音の位を悉極つくして、やすく(安)何共(なにと)もうたふ(謡う)位也。

然ば、安き位、一切堪能のわざ(態)か、誠におくぎ(奥儀)なるべし。

假ば、其すがた(姿)、年ふるき杉のごとし。

いつしかと神さびにけりかご(香)山のほこすぎ(銚楹)がもと(本)に苔のむすまで

鴨君足人

これについて、また十體の風姿あり。同じしるし申成。

#### 第一、祝言 上果 長高體 相老松

おもふことなどとふ人のなかるらんあふげばそらに月ぞさやけき 慈円

#### 第二、幽玄 上果 ゆや(熊野) 春の明ぼののごとし

忘れゆく人ゆへ(故)そらをながむれば(眺)たえだえにこそ雪も見えけれ

刑部卿範兼

#### 第三、戀慕 松かぜ(風)村雨 秋の夕暮れのごとし

消わびぬ(侘)うつろふ(移ろう)人の秋の色に身を木枯(こがらし)の森の下露

藤原定家

#### 第四、哀傷 小野小町

身にさむく秋の夜風の吹くからにふりにし人の夢に見えつる

曾禰好忠

第五、 闌 蟻通 拉鬼體

濡れて干す玉串の葉の露霜に天照る光幾代へぬらむ

藤原良経

第六、 麗體(れいたい) 大原御幸

しきみつむ(摘む)山路の露にぬれにけりあかつき(暁)をきのすみ(墨)染めの袖  
小待従

第七、 遠白體(えんはくたい) 鹽竈

第八、 濃體 百萬

おもひ草は(葉)すゑ(末)にむすぶ白露のたまたまきて(来)は手にもたまらず  
源俊頼

第九、 有心體(うしんたい) 蘆荻

津の國のなにわ(難波)の春は夢なれやあし(葦)のかれは(枯葉)にかぜわたる(風  
渡)なり

西行

第十、 事可然體(ことしかるべきたい) 江口

すみわびぬ身をかかすべき山里にあまりくま(隈)なき夜半の月かな  
藤原俊成

むかしのことは知らず、ちかくは(近)鹿園院伝様御第におきて(於)、諸家の名将、和州、  
江州の申楽、観世、犬王、および(及)様には祖父金春翁(金春権守か)まで、道を(問ふ)  
らひきこし、めされ(召され)、上覧にそなゆる(備)處、俗をのぞき(除)、位をたて(立  
て)、懸かりを定めおかれし段、此道のかみ(鏡)としらべ、玉をみがき(磨)、花をかざ  
す餘情幽華を本とす。(餘情とは、鎌倉・室町時代に和歌で重要視された美的理念のこ  
とで、詞では直接に表現されないが言外に感じられる繊細微妙なしみじみとした情趣  
のことで、幽華は奥ゆかしい華のこと。)

然といへども、当世胆のうの其物なくして(無)、道すたれ(廃れ)行事をなげく(歎く)。  
只下士(げし)のわらひ(笑)をいたまず(傷まず)して、上士の明眼(みょうがん)に見かか  
れ(懸)たてまつれ(奉れ)かすと、子孫をおもひ、上を仰ぎて申し上る處なり。

以上が「禅竹集」の「拾玉得花」であるが、続いて冒頭でも指摘した『世阿弥能楽論集』

「拾玉得花」の最後のところにある世阿弥と禅竹らの言葉(327頁)も引用しておきたい。  
此一帖、当芸習道の秘伝也。爰(ここに)金春大夫(禅竹)、芸能に見所(けんじょ)有るに  
依り相伝為る(する)所、此如(かくのごとし)。

正長元年(1428年)六月一日 世阿[花押]

もしほ草かきをく露の玉を見ばみがくこと葉の花はつきせじ

此の一帖、若年之時、師家(先生という意味の禪語で世阿弥のこと)之伝(つたうる)所也。  
享徳弍年(室町時代の 1453 年頃) 八月 日 氏信[花押]

金春家の秦河勝より出づる所の歴代の秘曲、家督一人に伝え、而其の他の庶子傍孫、遂に闡(読み、こん、意味は敷居か)奥を万一も窺うこと能(あたわ)ずや(矣)。  
然りと雖も、是(この)兄七郎氏勝不孝にして、而早世するが故に、老父、家伝之秘奥相續して、而これを子々而孫々に伝えて、万世に而も以て残さんと而も欲し、悉く家伝の秘曲を授けし我に教え、相伝せしむる所也。今又汝に家伝の秘曲遺さず教授せしむる所也。断絶せしむること莫れ(なかれ)矣。

明暦二年(江戸時代の 1656 年頃)丙申 竹田金春八左衛門 秦安喜 六十九歳 [花押]

## 五、「五音三曲集」

五音とは、祝幽戀哀闌の五種にして、三曲とは皮肉骨の三味なり。  
而も、和歌十體の設を之に配當して、二十六聲曲の批判を為したる者、即、本篇なり。  
五音次第と髓脳記、拾玉得花に参考して、古人の歌舞に対する觀念、如何を知るべき者也。本篇は、二十六聲曲批判を前記とし、後記は皮肉骨の曲味、呂律中の曲別、十三の節、懸、文字、拍子、その餘につきて、斯道の奥儀を開示する所あり。  
禪竹著作中の巨篇である。

### 五音三曲集序

それ、申樂舞歌の音曲、習道とはと、和歌をもてみなもと(源)とす。  
和歌は和國の風俗なれば、神明(天照大神)も感應なうじゆしますなり。  
されば、古歌の苦吟、曲身をふくんで(含んで)うたふ(謡う)を音曲とは知るべきなり。  
から(唐)の歌にも、こころ(心)にあるを志といひ、ことば(言)にあらはるるを詩といふ。  
古今のまな序にも、和歌はその根を心地(しんち)につけ、その花を詞林にひらく(開)といへり。是みな、心地よりおこれる曲味なれば、その心をふくみうたふを、音曲とは心得べきなり。心なくしてうたふは、ただ音斗にて、曲はなきもの也。  
しかれば当流習道に、五音の位あり、祝言、幽玄、戀慕、哀傷、闌曲なり。これに皮肉骨の三曲の工夫をそへり是は口傳。かるがゆへに、和歌の十體の名目をのせ、おなじく古歌をひきて(引)、五音漣聲の曲味となせり。五音本聲のうちにおきて、曲のしなじなをわかつ(分)、よくよくあちわふべし。

### 五音三曲第一、祝言

#### 祝言第一 治世安樂音の曲味。

毛詩 おさまれるよの聲は、やすんじてもて(以て)たのしむ(楽)といえり。此安樂音の字性、すぐに(直)ただしく(正)、やすき(易)くらみ(位)、殘(殘)の四音惣曲にわたる地

聲となる生曲(しょうきょく)なり。たとへば、よき(良)きぬ(絹)、ぬの(布)には、もん(文)の染色、うつくしく(美)いでくる(出)。かように、残(残)の曲に色をふかめて、次第次第にもん(文)をつくべし。此曲は、まことに骨味を存べき性根なり。年始の祝言に、人の御まへ(前)に参て、今年の御慶ともいひ、又千秋萬歳、目出といはんがごとし。古歌云、春日野に若菜つみつつ萬代をいはふ心は神ぞしるらん。

骨味 それ久方の神代より、あめつちひらけし、國のおこり、あまのほこの、すぐ成や、名もふた(二)柱の、神ここに、八島の國をつくりを(お)き、すべらよ(皇代)なれや、大君の御かげのどけき、時とかや。あをによし、ならのはもりの、神心、神心。すゑくらからぬ、都路の、すぐ成へきか、すがはらや、伏見の里の、宮づくり、大内山の、かげたかく、雲の上成、玉殿の、月も日鹿屋、みがくらん、みがくらん。

### 祝言第二、理世撫民の曲味。

此曲は、地體音におきて、世をことはり(理)、民をあはれむ(哀)曲聲の詠味にり。

古歌云、高き屋にのぼりてみれば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり

肉味 然に、宗廟(そうびょう)の神として、君をまもり、國家をたすけ、文武ふたつの道ひろく、九重つづく八幡山、神にも御名は、やつ(八)のもじ(文字)、それ諸仏出世委の本来空、しんしょう(眞性)ふしゃう(不生)の、みち(道)をしめし(示)、八正道をあらはし、人佛不二の御心にて、正直のかうべ(頭)にやとり(宿り)給ふ。人の國より我が國、他の人よりは、わが人と、ちかわせ(誓)給ふ、御めぐみ、げにありがたや。我等ごとき、あさましき、まよひをてらし給はんの、その御誓願。まのあたり、行教和尚の、御法(みのり)の水に、かげうつる、花の都を、まもらんと、美波の山に、すむ月の、光もみえ(三重)のころもでに(衣)、うつり給へり。さればにや、宗廟の跡、あきらかに、君が世の、すぐ成、みちをあらはし、國とみ(富)、たみのかまどまで、にぎはふ(賑)ひな(鄙)の、御調船。四海のなみも、しづかなり。利益諸衆生の、御ちかひ、二世安樂の、御徳は、猶さかゆくや。男山にし、松たてる、梢も草も、ふく風の、みな實相の、ひびきにて(響)、峯の山かづら、そのほか(外)さとがくら(里神樂)、ざんげ(懺悔)の心夢さめ、夜声もいどと神さびて、月かげろふの、岩清水の、あさからぬちかひかな。げにあさからぬちかひかな。

或和歌の秘書に、理世、撫民の體を、まことしくありのままに、げにさるさ事とおぼゆるやうにと、いへり。

理世體。山寺の入會(合)の鐘の聲ことにけふも暮ぬと聞ぞかなしき。

読人知らず

撫民體。春を経て御幸(みゆき)になるる花の陰ふりゆく身をもあはれとや思ふ。

藤原定家

### 祝言第三、松體曲味。

此生曲は、松聲の、諸木にすぐれいやたけ、神さびて、年ふりたるかかりの聲味なり。

古歌云 住の江の松を秋風吹からに聲うちそふる沖つしらなみ 凡河内 躬恒

骨味 さればにや、二柱の御神の、おのころじまと申も、此一島のことかとよ。  
およそ(凡そ)此島はしめて(始)、大八島の國をつくり、き(紀)のくに伊勢島、ひうが(日向)、ならびによつ(四つ)のかいがん(海岸)を、つくりいだし。日神月神、ひるこそきのおと申も、地神五代の、はじめにて、皆此島に、御出現。なかにも、皇孫は、ひうがの國に、あまくだり、給ひつつ、地神第四の、ほほてみのみこを、御出生、げにありがたき、世々とかや。天下をたもち給ふこと、すべて八十三萬、六千八百餘歳なり。  
かかるめでたき、王子たちに、御代をゆづりはの、権現とあらはれ、おはします、いざなぎ、いざなみの御代も、ただいまの國土なるべし。  
或和歌秘書に、いつきくも、ききざめもせぬていに、直ぐ、ものつよく、しかもかたへ(傍へ)にこん(混)せぬ體といへり。

#### 祝言第四 行體曲味(ぎょうていきよくみ)。

松にたかはざる(違はざる)體に、ふじ(藤)かかり(懸)なびきたる餘情の曲聲なり。  
古歌云 ゆふつくよ(夕月夜)しほ(潮)みちくらし難波江の  
蘆の若葉をこゆるしらなみ(白波) 藤原秀能  
皮味 おもしろや、名所はさまざま(様々)おお(多)けれども、わきて(別)ちかい(誓)も、かげたかき、あまのこやね(天兒屋命)の、神代より、ちかひのすゑも、あきらけき、月にてりそふ、春の日の、御かげを四方に、かすが(春日)山、ひろきめぐみの、ありがたさよ。ことさらに、ときも(時)もあひあふ(相逢)、春の色、ひがし(東)をしる(知る)もかしま野や、みどり(緑)もおなじ、若草の、山はみなみ(南)の、都の空、くもらぬ神の、時よ(代)かな。ここはとりわき、さほ(佐保)山の、その山ひめ(姫)の、衣ほす、神しろたへの、露かけて、玉かつら(葛)、くるとし(来年)のを(緒)の、春ごと(毎)に、春ごと(毎)に、露の衣、ぬきうすき(薄)、いと(糸)のみだれも、あま(天)つ日の、のどけきいろに、そめなして(染め)、猶しらきぬ(白絹)の、うららなる(麗)、空や雲まに、にほふ(匂)らん(匂)らん。  
或和歌の秘書に、松の體にたがはざる(違わざる)うち(中)に、少し(すこし)ことのほそき(細き)にてあるべしといへり。

#### 祝言第五、長高體曲味。

くらみ(位)ふかく(深く)、たけたかくして、まことにおよば(及ば)ざる曲體なるべし。  
古歌云 忍ぶ(思う)事などとふ(問う)人のなかるらんあふげば(仰)空に月ぞさやけき。  
慈円  
骨味 放生川の一部、  
有難や百王守護の、日の光、ゆたか(豊)にてらす、あめがした、いく萬代の秋ならん。  
和光の影も、くもりなく、神と君とに、つかへ(仕え)の臣、武内と申老人なり。  
久かた(方)の、月のかつら(桂)の、お(を)とこやま、さやけき影は、ところがら。  
或和歌の秘書に、生得の口むき(向き)、天性といへり。

#### 五音三曲集第二、幽玄

### 幽玄第一、心詞幽玄曲味。 井筒の一節

此曲味、花紅葉の色めかしき風色にはあらず、心ほそく、かすかに、興に乗じて来、興つきて歸る(かえる)、幽情の曲感なるべし。

古歌云 有明のつれなくみ(見)へしわかれ(別れ)よりあかつき(暁)ばかりうき(憂き)物(もの)はなし。壬生忠岑

皮味 さなきだに、もののさびしき(寂)、秋の夜に、人目まれなる、古寺の、庭の松風、ふけすぎ(更け過ぎ)て、月もかたふく(傾)、軒端の草。忘れてすぎし、いにしへ(古)をしのぶ(忍)かほにて、いつまでか、待事なくて、ながらへん。

げに何事も、思出の、人には残(残)る世の中かな。ただいつとなく、一すぢ(筋)に、たのむ(頼む)ほとけの(佛)、みて(御手)のいと(糸)、みちひき(導き)給へ、法の聲。

まよひ(迷い)をもてらさせ(照らさせ)給う、御ちかひ、御ちかひ。げにもとみえ(見)て、有明の、ゆくゑは西野、山なれど、ながめ(眺め)はよも(四方)の秋の空。松の聲のみ、きこゆれども、嵐はいづくとも、さだめなき世の、夢心、なにのをとにか、さめてまし、さめてまし。

或和歌の秘書に、心こと(言)葉、かすかに、ただならずといへり。

### 幽玄第二、行雲廻雪曲味 (かくうんかいせつきょくみ)

はな(花)やかに、しかもひへのぼり(冷え昇)たる餘情詠曲のかかり(懸)、よし(由)あるべし。

古歌云

行雲體。下もゑに思きゑなんけふりだに跡なき雲のはてぞかなしき。

廻雪體。風吹ばよそに(外)鳴海のかたおもひおもわ(は)ぬ浪になく千鳥かな。

骨味 松風の一節

心づくしの秋風に、海はすこし(少し)、遠けれ共(ども)、波ゆきひら(行平)の中納言、閑吹こゆると詠給う。うらは(浦)の浪の、夜る夜るは、げに音ちかき、あまの家、里ばなれ成、通路の、月より外は、とも(友)もなし。

實やうき身の、わぎながら、殊につたなき、あまを舟の、わたり(渡)かねたる、夢の世にすむとやいはん、うたかた(空形)の鹽くみ事、よるべなき、身は海女人の、袖ともに、おもひをほさぬ(干)、心かな。かくばかり、へがたく見ゆる、世の中に、うらやましくも(羨)、すむ月の、出鹽をいざや、くまふ(汲う)よ。かげ(影)はづかしき(恥)、我姿、我姿。

しのび車を、ひく(引く)鹽の、あとにのこれる、たまり(溜)水、いつまですみ(住)は、はつ(終)べき。野なかの草の、露ならば、日影にきへも、うす(失)べきに、是はいそべ(磯)に、よりも(寄藻)かく。あまのすて草、いたずらに、くちまさりゆく、たもと(袂)かな、たもと(袂)かな。

肉味

さればこころ(心)を、たね(種)として、花もさかゆく(咲行)、ことばのはし。

きのつらゆき(紀貫之)もかき(書き)たるなり。

ありはら(在原)の業平は、その心あまりて(餘)、ことばはたらず(足)。

たとへば、しぼめる花の、色なくて、にほひ(匂い)のこるに、ことならず(異)。

宇治山の、きせん(喜撰)がうたは、そのことばは、かすかにて、秋の月の、雲にいる(入る)。小野の小町は妙なる花の、色ごのみ、歌のさま(様)さへ、おうな(媼)にて、ただよはよはと(弱々)、よむとかや。

大伴のくろぬし(黒主)は薪をおへる(負)、山人の、花のかげに、やすみて、いたずらに、日をやおくる(送)らん。是等は、和歌の詞にて、心の花をたらはす(現わす)、千種をうふる(植)、吉野山、落花はみち(道)を、うづめ(埋め)ども、去年のしほりぞ、しるべ(標)なり。

或和歌秘書に、行雲廻雪は、幽玄のうちの、餘情猶勝(すぐれて)、薄雲の月を帯びたるよそほひ(装)、飛雪(ひせつ)の風にただよふ(漂う)心地して、心詞の外に、影うかび(浮かび)うくらん、といへり。

### 幽玄第三、見様曲味 見精體

花におもしろきかかり、耳目をおどろかす(驚)曲聲、景中に心あり。

古歌云 下紅葉かつ散山の夕時雨ぬれてやし(鹿)のひとりなく(鳴く)らん。

藤原家隆

皮味 田村の一節

しゅんせう(春宵)一こく、あたい(値)千金、花にせいきょう(清香)、月にかげ(影)、げにせんきんにも、かへじ(易)とは、今此時かや。やうやう、面白の、地主の花よ候やな。櫻の雲間に、もる(漏る)月の、雪もちる、夜あらしの、さそふ花とつれて、ちるや心成らん。さぞな、名にしほふ(負)、花の都の、春の空。げにとき(時)めける、よそほひ(装)、青陽のかげ、みとりにて、風のどかなる、音羽の瀧の、しらいとの、くりかへし、くりかへしても、おもしろや。有難やな、地主権現の、花の色もことなり(異)、ただたのめ、しめぢが腹の、さしも(指燃)草、我世の中に、あらんかぎり(限り)はの、御せいぐわん(請願)。にごらじ(濁らじ)物を、清水の、みどりもさすや、青柳の、げにもかかれたる(枯)、記なりとも、花櫻木の、よそほひ(装)。いづくの春も、おし(押)なべて、のどけき形は、有明の、天も花によゑ(酔)りや。面白の春べや、あらおもしろの、はるべ哉。

四季の雪の一節

抑、天のうるほひ(潤)に、雨露霜雪の、よつ(四)をたて(立)、おなじく雪月花(せつげつか)の、三(みつ)の徳をほむるにも、雪こそ殊にすぐれたれ。

まづはるは(春)は、梅さくら、さくよりちる(散る)までも、雪をわす(忘)るる、城もなし。夏は五月雨の(さみだれ)の、ふるや(古屋)の軒ば、くれ(暮)ながら、庭はくもらぬ、抑の花のかきね(垣)は雪に、あらはれ。夜さむ(寒)わすれて、まつ月の、山の端しろき、かげまでも、ふらぬ雪かと、うたがはれ(疑)、冬野にのこる、菊までも、すは初雪と、

おもしろさに、山路のうき(憂)や、わするらん。

或和歌秘書に、此體は、つたな(拙)からん口から(柄)にて、つやつやよ(詠)まるまじきすがた(姿)なるべし。それも、堪器(かんき)の所には、やすらかなるべき様なり。

景氣歌とて、そそめき(騒)かけてよむなり、といへり。

#### 幽玄第四、遠白體曲味 (えんはくたいきょくみ)

聲懸、曲味、いづれもゆう(優)に、たけありて、ほのか(微)なる體曲なり。

古歌云 天の戸をおし明(あけ)がたの雲間より神代の月の影ぞのこれる。九条良経

#### 肉味 花筐の一節

君がすむ(栖)、こし(越)の白山(しらやま)、し(知)らねども、ゆ(行)きてやみ(見)まし、あしびきの、やまと(大和)はいづく、しら雲の、高間の峯の、よそ(外)にのみ、みてややみ(止)なん、を(お)よびなき、雲井はいづく、みかげ(御影)山、日のもと(本)なれや、くもりなき、玉ほ(穗)の都へ、いそぐ(急)なり。

ここはあふみの(近江)の、うみなれや、みづから(自ら)よし(由)なく(無)も、およばぬ戀に、うき船の、こがれ(漕)ゆく、旅をしのぶの(忍)、すり衣、すり衣。涙も色か、くろかみ(黒髪)の、あかざりしわかれぢ(別路)の、跡に心の、うかれきて、しか(鹿)のおき(起)ふし(臥)、たへかねて、猶かよひ(通)ゆく、秋草の、野くれ山くれ、露分て、玉ほの宮に、つきにけり、つきにけり。

或和歌秘書に、器量の稽古、年ふりたらん故に、よまるべきすがた、といへり。

古歌云 津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり。

#### 骨味

#### 葦荊の一節

あるは男山の、むかしを思い出(いで)て、女郎花の、一時をくねる(曲)といへども、いひなぐさ(慰)むる、ことのは(言)の、露もたははに、秋萩の、もとの契の、きへ(消え)かゑ(返)り、つれなかりける、いのち(命)かな。さればかほど(程)に、おとろへて(衰)、身をはつかしの(恥)、もり(森)なれども、ことばの花こそ、たより(便)りなれ。

なにわづ(難波津)に、さくや此はな、ふゆ(冬)ごもり(籠)今は春べと、さくやこの花と、栄へ(さかへ)給ひける、仁徳天皇と、きこへ(聞こえ)させ給しは、難波の獅子の御事。又、あさか(安積)山のことのは(言葉)はうねめ(采女)のさかつき(盃)、とり(取)あへず、恨をのべし。ゆへ(故)とかや。此二歌は、いま(今)までもうたのちちはは(父母)なるゆへ(ゑ)に、代々にあまねき、花いろの、ことのはぐさ(草)の、たね(種)として、我等ごときの、てならふ(手習)はしめ(始)なるべし。

しかれば、目にみえぬ、鬼神をもやはらげ(和)、もののふ(武士)の、心なぐさむる。

ふうふ(夫婦)のなさけ、しる事も、今身のうへに、しられたり。

津の國の、なにわの春は、夢なれや、葦のかれはに、風わたる。

浪のたちみ(立居)の、ひま(隙)とても、あさ(淺)かるべしや。わだつみの、はま(濱)の

まさご(砂)は、よみつくし(讀)、つくすとも、この道はつきせめや。ただ、もて(玩)あそべ。なにしほ(お)ふ、難波のうらみ、うち忘れて、ありしちぎり(契)に、かへりあふ、えん(縁)こそうれし(嬉)、かりけれ。

或和歌秘書に、有心體をもて、至極とすべし、といへり。まことしからぬ事を、ただとさま、かうさま(様)に、心ふかきやうによみたりとも、それをば有心體に攝して(せつして)、理世等の歌とは申すべからず。有心體にもあまたの品あるべし。

理世、撫民等も、是より出たる風味也。ただ、心をふかくよむべしといへり。

### 戀慕第一、濃體曲味

遠見のとをき(遠き)すがた(姿)を近々とみるやうに、こまやかにしるも、心ふかく、えんなる體曲なり。ゆふげん(幽玄)のかたへ、うとき(疎)かたなるに似たり。

古歌云 立出て妻木をかりしかたおか(片岡)のふかき山路と成にけるかな。

骨味 班女の一節

月重山(じゅうさん)に、かくれ(隠)ぬれば、扇をあげ(揚)て是をたとへ(喩)、花きんしゃう(巾上)に散りぬれば、雪をあつめて(集)、春をおしむ(惜)。

ゆふべ(夕べ)の嵐、あしたの雲、いづれか思の妻ならぬ。

さびしき秋の、風の音、けいろふ(鶏籠)の山にひびきて(響きて)、あけ(明)なむとして、別をもよふし。せめて(責)ねやもる月だにも、しはじ(暫)枕に、のこらずして、又ひとりねに、なりぬるぞや。

すいちゃうこうけい(翠帳紅閨)に、まくら(枕)ならぶる、床の上、なれしふすま(襖)の、夜すがらも、どうけつ(同穴)の跡、夢もなし。よしそれも、おなじ(同)世の、命のみを、さりともと、いつまで草の、露の間も、ひよくれんり(比翼連理)の、かたらひ(語)。そのりざんきう(驪山宮)の、ささめことも、だれかききつたへて、いまの世まで、もらす(漏)らん。さるにても、わが妻の、秋よりさきに、かならずと、ゆふべの敷は、かさな(重)れど、あだし(徒)ことばの人心。たのめて(頼)こぬ(来)よは(夜)、つもれども(積)、らんかん(欄干)にたち(立)つくして、そなたの空よと、ながむれば、ゆふ暮れの、秋風。嵐、山おろし、野分も、あの松をこそは、をとつるれ。わがまつ(待つ)人よりの、音信を、いつき(聞)かまし。せめてもの、かたみ(形見)の扇、手にふれて、風のたよりと、思へども。夏もはや、杉のまどの、秋風ひややかに、吹きおちて、だんせつ(団雪)の、扇も雪なれば、名をきくも、すさましくして、秋風うらみあり。よしや、おみへば、たれとても、あふはわかれ成べき。そのむくひ(報い)なれば、今さら、世をも人をも、うらむまじ。ただ、おもはれぬ、身のほどを、思つづけて、ひとりゐの、はんぢよがねやぞさびしき。

或和歌秘書に、此體をばあいかまへて(相構えて)、初心の時より、よみならひて、詞つかい(遣い)を、あぎやか(鮮やか)に、口かろ(軽)なるように、まなぶべし。

しかも、ことわり(理)、たしかに、きか(聞)するさま(様)なるべし、といへり。

## 戀慕第二、麗體曲味

戀におもひ(思)わび(侘)て、きやう(狂)せるすがた、うるわしき(麗)曲體なるべし。

古歌云 ほのほのと明石うらのあさぎりに嶋がくれ(隠)行舟おし(惜)ぞおもふ(思)。

詠み人知らず。

肉味 松風の一節

こひ草の、露も思も、みだれつつ、こころきょうき(狂気)に、なれ(馴れ)衣の、  
み(巳)の日のほらへ(祓)や、ゆふしで(木綿垂で)の、神のたすけ(助)も、なみ(波)のう  
ゑ(上)、あわれにきへし(消えし)うき身かな。あわれいにしえを、思ひいづればなづか  
しや。ゆきひら(行平)の中納言、三とせ(年)はここに、すま(洒)のうら。

都へのぼり給しに、此ほどのかたみとて、御たてゑぼし(烏帽子)、かりきぬ(狩衣)を、  
のこしをき(置き)給しに、これを見るたび(度)にいやまし(彌増)のおもひ草は、すゑに  
むすぶ(結)露のまもわすらればこそ、あぢきな(味気無)や。かたみこそ、いまはあた(仇)  
なれ、是なくば、わするるひま(假)も、ありなんと、よみ(詠み)しも、ことわりや。  
猶思ひこそはふかけれ。宵々に、ぬぎてわがぬる、かりころも(衣)、か(掛)けてぞたの  
む、おなじ世に、すむ(栖)かい(効)あらばこそ。

忘れがたみも、よし(由)なしと、捨てもおかれず、とれば(取れば)おもかげ(面影)に、  
たちまさり、おきふし(起伏)わかで(分かで)、枕より跡より、こひのせめくれ(責来)ば、  
せんかた(爲方)なみだ(涙)に、ふししづむ、事ぞかなしき。

和歌の三體にも、ただ戀は艶よとかか(書)れたれば、えんに心ふかかかるべき、やらん。

## 五音三曲集、第四、哀傷

### 哀傷第一、魂白體曲味(たましろきていきよくみ)

是はただ縁生(えんしょう)の色心(しきしん)をはなれ(離れ)たる亡魂の、ゆめまぼろし  
(夢幻)にみる(見る)がやうにあるべきすがたか。

古歌云、あさちふ(淺茅生)や袖にくちにし秋の霜忘れぬ夢を吹あらしかな。

皮味 夫三界、やすき(安)ことなし、なを(猶)し火宅のごとしと、佛もとき給へり。  
まして(況)や、我等衆生として、こと(殊)にまよひ(迷)のうみ(海)ふかき、  
雲水の世の、あわれ(哀)さに(哀)、いつかうか(浮)まん、無明のなみの、よ  
るべ(寄)いつくと、さだめ(定)まし。

一生は、風の前の雲、夢の間に塵やすく、三界は水のうへのあは(泡)、光の  
まへにきえんとす。いらんでん(覽殿)のうゑには、有爲のかなしみをつけ  
(告)。らんでん(鸞殿)のうゑ(上)には、有爲(うい)のかなしみをつけ(告)。  
ひすゑちやう(翡翠帳)のうち(内)には、らんでん(鸞殿)のうゑ(上)には、有  
爲(うい)のかなしみをつけ(告)。

ひすゑちやう(翡翠帳)のうち(内)には、むろ(無漏)のかんりき(感力)ありと  
かや。榮花は是、春の花、きのう(昨)はさかんなれども(盛)、けふ(今日)は

おとろふ(衰)。かんりき(感力)の、秋の光、あしたにぞうし(増)、ゆふべにげんす(減す)とか。春さり秋きたって、花さんし葉をつ。時うつり、ところへんして、たのしみすでにさって、かなしみはやくきたれり。あさがほの、花のうへ成、露よりも、はかなきものは、かげろふの、あるかなきかの、こちして、世を秋風の、うちなびき、むれみ(群居)るたづ(鶴)の、音をなきて、しで(死出)の田おさ(長)の、一こゑ(聲)も、たがよみぢ(冥途)をかしらす(知らず)らん。あわれなりける、人かい(界)を、いつかは、はなれ(離れ)はつべき。

此曲、まことに骨ずい(髓)にとほれる(徹)感聲のかかり、よくよく念籠して、曲味を知るべし。

### 哀傷第二、物哀體曲味(ものあわれたいきよくみ)

諸行無常の世のことはりを、おもひ詠するさまなり。大かたのあわれ、身のありさま、思つづくる曲聲なり。

古歌云、小篠原風まつ(待つ)露のきえやらでこの一ふし(節)をおもひを(置)くかな。

### 骨味 反魂香(はんごんこう)の一節

つたへきく、かんわう(漢王)は、りふじん(李夫人)のわかれ(別)ゆへ(故)、かんせんでん(甘泉殿)の、ゆか(床)のうへに、ふるきふすま(襖)の、うらみをそへ。きうかちょう(九花帳)の、うち(内)にては、このかう(香)のけぶり(煙)をたて(立)。月の夜ふけ行く、風の聲、ゑんようへんゑんようへんと、けしき(景色)だつ、玉殿にうつろひて、りふじんの御かたち(形)、ほのかにみえ給いり、三五夜中の、新月の、夜半の空、くまなくて、ちやうあんうんしゃう(長安雲上)のよそおひ(装)、け色にいたる(到)。心おちして、みなかんるい(感涙)を、うるほせば(沾)。君もれふがん(両眼)に御袖をおしあてて、はんこん(反魂)の、けぶりのうちに、たちよらせ、給へば。又りふじんな、きゑきゑと、時雨もま(交)じる、有明の、みえ(見え)つかくれつ(隠れ)、かげろふの、あるかなきかの、御すかた、かくやと思、しられたり。

角田川(すみだがわ)の一節、殘(のこり)ても、かひ(効)あるべきはむなしく(空)て、むなしく(空)て。ある(或)はかいなき、はは(葉々)きぎ(木々)の、みえつかくれつ、面影の、つだめなき、世のならひ。人間今うれひ(愁)の、花ざかり、むじゃう(無常)の嵐、音そひ(添)しゃうしちやうや(生死長夜)の、月の影、不定(ふじょう)の雲、おほ(覆)えり。實め(目)(じちめ)の前の、うき世かな、うき世かな。

或和歌秘書に、此體ぞ、歌の本懐(ほんかい)にてあるべき、只最初より、心をふかくよまんとすべきことよ、といへる。

### 闌曲第一、鬼拉體曲味(おにをひしぐたいきよくみ)

此位、ただひとり音曲にて、なにともうたふ闌聲。

こうなり(劫成)名とげて(遂げて)、如意堪能の達聲の曲味成。

古歌云、ぬれて(濡)ほす玉くし(柏)の葉の露霜に天てる光いく代へぬらん。

骨(皮)味 歌占の一節

それ、歌は、あめつちひらけし、はしめより、陰陽の二神、あま(天)のちまたに、ゆき(行)あひ(合)の、さよ(夜)の手枕、むすびさだめし、代をまなび(學)、國をおさめて(治)、今も道ある妙文なり。うらと(問)はせ給へや、うらうら、とはせ給へや。神風や、伊勢のはま荻、名をかへて、名をかへて。よしといふも、あしといふも、おなじ草なり、ときくものを。よし(葭)といふも、あし(葦)といふも、おなじ草なり、ときくものを。ところは(所)伊勢のみこなりと、なにわの事も、とひ給へ。人ごころ、ひけば(引)ひかるる、あつさ(梓)弓、いせや日うが(向)の事も、とひ給へ、とひ給へ。

或和歌秘書に、此ていは無上なり、すべてなり(成)がたきすがたなり。はじめは(初)、これをまなべば、あひ(相)とを(遠)になる、はなはだ俗にいらぬ(入らぬ)てい(體)。

ただ、心にかけ(掛)ながら、なさずして(為)、稽古入りぬれば、心もすくよかに(健)つ(募)のり(募)、ことばも物づよくなりて、自然にそのものになる。骨を存して、餘情をわすれ(忘れ)たるなり。一切のわざ(態)は、つよきをもて、よろしとす。鬼を拉ぐ體、歌の中道なり、こころをとどめて(留)、わきまへ知るべしといへり。

私云、此つよき事を、鬼よとは意得るべからず。鬼とりひしぐものを知るべし。

幽玄至極の心にてや、あるべき。返々、鬼よりうへの(上の)儀を知るべし。

### 闌曲第二、若聲體曲味

たけたるわざは、功成名とげて、年来の位なるゆへ(故)に、としよりの物なれば、老聲はもとよりの事にて、なすにおよばず。若聲を、老後にまなぶ。

向去却来の闌曲也。稚児の、たこたこあよみ(歩み)せるかかり、ともいへり。

古歌云、鶯よなどさはなくぞちやほしきこなへやほしきははや戀しき。

骨味 弱法師の一節

それ、ゑんあふ(鴛鴦)の、ふすまのした(下)には、たちさる(立去)おもひをかなしみ、ひぼく(比目)の枕のうへには、なみ(浪)をへたつる(隔つる)うれい(愁)あり。

いはんや、心ありかほ也。にんげん(人間)うみの身とむまれ(生まれ)、うき年月の、ながれては、いもせ(妹夫)の山の、中におつる、吉野の川の、よしや世とも、おもひもわかぬ、心かな。あさましや、前世にたれをか、いとひ(厭)けん、いま又人のざんけむにより、ふけう(不孝)のつみ(罪)にしづむ(沈む)ゆへ(故)、おもひのなみだ、かきくもり、まうもく(盲目)とさへ、なりはてて、しゃう(生)をもかへぬ、この世より、ぢごく(地獄)のたびにまよふなり。もとよりの、心のやみは、ありぬべし。つたへきく、かの一行のくわら(果臝)のたび(旅)、かの一行のくわら(果臝)のたび(旅)、あんけつだう(暗穴道)の、ちまたにも、くよふのまんだら(曼荼羅)の、光明かくやくとして、ゆくすゑ(行)

末)をてらし(照)、給けるとかや。いま(今)も末世といひながら、さすがな(名)にほ(負)ふ、この寺の、佛法さいしょ(最初)の天王寺の、石の鳥居、ここなれや。たち(立)よりてまい(参)らん。いざたちよりてまいらん。

此古歌の註に、稚児のたこたこあゆみしたる體の歌といへり、貫之が女の、九(宮か)にて読めるなり。俊頼納言は、此歌を詠して、落涙しけりと、かかれたり。

又、たけたるは、老の字也。此心、みやび(雅)、しづかなる(静)よし(由)かかり(懸)然るべき心か。

### 五音三曲、廿六聲曲之次第、畢。

一、夫、三曲は、序に口伝と申うへ(上)は筆にのせがたしといへども、しいておおかたのおもむき(趣)をしるす(記)。皮肉骨の三曲、皮は肉よりおこり、肉は骨よりおこり、骨は五臓よりおこる。五臓の不浄は、一水よりおこり、一水の出所一念のア字なり。ア字はなによりおこれり、ナニは何ぞ、不可得、不可得、不可得。

此の不可得の無味の智水をふくんで(含)詠吟すべし、是則、聲佛事ををなす(作)菩提の妙言成るべし。

此不浄の種、骨肉をしらずば、いかに皮を似せたりとおもふとも、それにてあるまじきなり。種骨をしりて、肉にかくし、肉を知て皮にかくせば、まことにうつくしや(美)と見ゆる、皮にてあるなり。種をしるは道、此道をしる心は骨力なり。それをやわらぐる(和)満風は肉身なり。それを猶ふかめて(深)、うつくしくみするは、うはかわ(表皮)なり。是幽玄也。かすかにふかきは、骨肉二をしれる心をうづめ(埋)ばなり。うはかわばかりは、あさく、ちかき(近)にて、幽玄にてはあるまじきなり。然らば此あてがい、極たる秘曲なり、部下に曲の大事なり、師家の道に付て、工夫安出の位なり、別て口伝あるべし。

曲一番の在所をささ(指)ば、桧垣女の曲の「らうすいかげしづむで」(老衰影沈)舞一指の裡にも(うちにも)これあり、舞歌一心の大事也。

### 一、呂律中曲、

呂はおうやう(大様)なる曲、皮なるべし。律は利々めけるすがた(姿)、すみのぼる(澄上)曲、肉なるべし。中曲はこまかにちぢみ(縮)、まがれる(曲)急曲、骨なるべし。此呂律中曲は、唱聲よりさだ(沙汰)せらるる事なるを、わたくしにとりあわせ(取合)たる儀也。

但、しばらく(暫)皮肉骨の在所をささば、かくのごとくなるべし。

すべて音曲の心ね(根)に此三曲をもる(漏)べからず。節の一句にも、曲、臥とうたふところに、此三曲の性根かんよう(肝要)たるべし。

是等は、口伝あり。舞歌一心になる大事といふも、舞は音曲よりおこれり。音曲息よりおこる、息は五臓よりいづれば、舞風の根源、此三曲なり。又是、秘々中の大事、口伝なるべし舞歌の二極、ともに不定のきたなき(穢)所より出生する息と知事、きわめ(極)なるべし。たとへば、せんたん(梅檀)はふた(二)葉よりかう(香)ばしく、

花の種は、地にうづもれて、梢にのぼるがごとし。善悪邪正一如。

一、節の事 甘節(あまぶし)、曲節(まがりぶし)、力節(ちからぶし)、流節(ながれぶし)、懸節(かかりぶし)、上節(あがりぶし)、下節(さがりぶし)、字自枝折節、心自枝折節、拾節、命節、釣針節。

甘節とは、あまきふしなれば、あまかるべきなれども、さのみあまければ、こき(濃)あじ(味)はひにてわろし。さるほどに、みづみづといひなせば、ゆふげん(幽玄)に、おもしろく、きこゆる也。たとへば、三井寺に「秋の夜すがら、月すむ(澄)」、からの臥、甘の節なり。まへ(前)を大事に云て、からをうきうき(浮)と、重せずして、いひながして「月すむ」にて、きと心ねを入るなり。至々ては、あまきふしをば、けなげにいへる、一の故實(こじつ)なり。曲節は山姥に「山めぐりして、ゆくゑもしらず」と云中曲也。これは、難所をば、きうに(急に)、ちらりと、こす(越す)やうに、いふべし。たまれば(溜)重曲になりて、耳につくなり(着)。力節は、「たびかさね、雪山を」のふし(節)、ね文字を、口のうちに、やわらかにひき入て、いき(息)にてゆるゆる(緩々)といへば、力節にならぬ也。力節は、下手のわざなり。柳の能に「落葉のつもる」ちの字、わるく(悪く)いへば、力節也。流節「さほ(佐保)の山べ(部)の、春の色」山にてたまりて「べの春の色」をながして「はんさん」までたまるなり。ふせいも(風情)、音曲も、たまるは、ながれんため池、ながれずして、そのままたまるは、しんてい(深底)にたまれる、かんすい(澗水)のごとし。ながれざれば、死水也、にごりてくちはつる(腐)、さらに水の能なし。いかにも、たまらば、ながるべき也。懸節はかかり(係)なり。ふしにては、これがよけれども、かかりにてわろきふしあり。かかりだによくば、ふしのうつくしきばかりは、ちひさく(小)てわろき也。「苔のした(下)にはうづもれん、さらばうづもれん」のはの字を宮の聲の位にあぐれば、かかりよくなりて、英銀たぶやかに、大になるなり。上節は上るふし也「行教和尚の、御法(みのり)の水に、かけ(影)うつる(移)」のうつるなり。呂より羽、宮の律にかかる、あはひのふしなれば、のぼりふしといへり。此ふしを、そりやくに思へば、道なくして山にのぞみ、船橋なくして川を渡らんとするがごとし。下節は、大かた上節の心根におなじ。律より呂になりくだるところ、又そりやくに、やすくてはわろし。「鳥は物かはと、詠ぜしも、戀ぢのたよりの(便)、音信」のくだりなり。字よりしほる節、「あんごの御法とは、申は御母まやぶにん(麻耶夫人)」の御ははをただしくいひて、ぶにんより字をよわく(弱)、心をしほる也。心よりしほる節、しほくみ(鹽汲)に「月こそさはれ、あしの屋」といふところより、心をしほりて「なだのしほくむ」とにほひ(匂い)より字にうつる所也。ひろひ(拾い)節、七五七五とうたへ、五七ともうたへ、拍子に字のあまるをひろうなり。ひろわぬやうにいへば、すゑにててあまりて、拍子のびて(延びて)わろし。いかにも、ひろうよときこゆるが、よきなり。

「御産平安、王子ご誕生なる、むまやどの王子」のなるより王子までは、拍子を體

にひろいて、字を用になすなり。命節は、小歌にても、くせまい(曲舞)にても、いひおさむるふし也。そこを、きと性根を入れて、信に言(いひ)とむべし(止むべし)。是則命成べし。「月かげろふの、岩清水の、あさ(浅)からぬちかひ(誓)かな、げに。」と云おさむる所也。

### 一、かかり(懸)の事

およそ(凡そ)かかりは、詠吟の順路なり、水の高地より平地にくだる(下)がごとく、うつくしく、吟のそろりとくだるように、節を付くと心得て、いひくたすべし。字性のなまる(訛)も、節のわるきも、かかりだによければ、幽玄の曲の懸なるべし。されば、かかりは、ただ曲のすがたなり。すがた幽玄に上果なるを、かかりの風姿とすべし。節たかにこわこわ(強々)しくして、詠吟くたらざるを、下本のかかりと知るべし。かかりは體、節は用なり。大かた、かかりのすがたは、呂律呂とうたふ。律呂のあいだ(間)に、中曲の眼となる曲所はあるべき也。今あんして(按)思ふに、古歌の詠吟のすがた、そのまま音曲のかかりと成なり。姿、中高(なかたか)也。ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟おしぞ思ふ。詠み人知らず是を高吟して、音曲のかかりをしるべ也。

### 一、文字の事 ぬす字、息字(そくじ)、五音連聲字、一字、重字(じゅうじ)

ぬす字はぬすむ字也、字をいひつむれば、拍子におくる(後)ところを、文字一ぬすめば、拍子にあひて(合)、曲感となるなり。大かた、ひろふふしに似たれども、それは、二字三字ともあまるをば、ぬすみとることなければ、ただひろいて、拍子にあわする(合)也、これによりて、大にかはれる事なり。「あらし(嵐)、山おろし(下)、野分(のわき)も、あの松をこそは、音信るれ、我まつ人よりの、おとずづれを、いつきかまし」のおの字をぬすみて、と文字よりいへば、おもしろくきこゆる也。是にて、萬曲知るべし。

そく(息)字は、いきなり、いきをつ(繼)がずして、長曲のところを、もじにていきをたすくる(助)、是又秘事也。長曲のうちに、かならずゆるす(許)字あり、此字にて息をたすくるなり。「又或時は、聲をきく、あいしう(哀執)のころ、いとふかき(深)、ころにおもひ、くち(口)にいふ、まうしうのえん(妄執の縁)と、なるものを」の「こゑをきく」より「物を」までは、おなじ(同)いき(息)にて、長曲なり。このうちに「あいしうのころ」の後のこの字「心に思」の後のこの字「思ひ」のひの字「まうしうのえんと」のとの字なり。ふしのかかりによりて、「何の字にてもゆるすところあり、是を息字と心得るべし。

五音連聲字「あいうゑを、たちつと、まみむめも、らりるれろ、かきくけこ」等の五音の響、うつくしく連聲する所也。

「しるしの松なれや、ありがたの、御かげかな、やな」のあもじはやのひびきなればひびきにゆつりて、へち(別)にあをいはず、やもじをながめて、そのにほひより、「りがたの」といへば、おもしろく、きこゆる也。ぬす字に似たれども、ぬす字は

拍子を體にするゆへに、のぶるところをぬすむなり。

是は五音にひびき通すれば、その字をばいはざれども、其字あるによりて、ぬす字には大にかはれる也。これ五音相通、かんよう(肝要)なるべし。

詠吟のかかりといふも、古歌のすがたなり。古歌というも、よき歌は此五音連聲をもてつらねたれば、ただ五音かんようと知るべし。此五音にてこそ、くち(口)のうち(中)もうるはしく、にほやかなるべけれ。返々、此五音かんようと知るべき也。一字とは、まな(眞字)に書ところの一字一字を、かろく(軽く)いひて、てにおはの字にてのべ(述)しじむる(縮)なり。

たとへば、山、川、海といふ一字ずつを、いろはよみ(色葉讀)にはいかぬ也。

字のうち(内)をひろひて(拾)、かろくいふべし。重字は口内のくちびる、きば、のんど、あぎ、したなどにて、其字其字をわ(分)かつとし(知)りてうきうきとといふべし。たとへば、きばにていふ字を、くちびる、したなど合力すれば、重してきたなくきこゆるなり。さらに、はなはなときこへぬ事なり。

「いまさら(今)、おもひ、しられ(知)たり。はな(花)見ずは、いかでか此山に、一やあかさん」のかの字、あぎにて、うきりかに、そといふべきを、いき(息)のはなち(放)ちからすぐる(勝)也。かやうの所にて、大かたを心得べし也。

いきは、惣體の地なれども、かやうの字によりて、つよきはきかれぬ也。

## 一、拍子の事

是は、おのづから、此家にむまるる(生まるる)もの、さるがく拍子は、しるもの也。されども、まぎるる(紛)事あり、しづかにといえ、おそくなり、かろくといえ、はやくなり、などする事に、おおく(多く)まぎれある事どもあり、是を心得べし。おもきかろきかわりめ「とうとう」とうつ(打)はおもし、「とく」とうつはかろし。一段一段の曲を、しづかにかろくいふべし。をもきはよき(善)ところあり、ただし、た(垂)るきがわろし。おもきはよき所といふは、心を真にもちてつづみ、たいこのうち物(て(手)をば、かろくうつべし。心をそりやく(疎略)にして、手をおもくうつは、しだるきなり。惣して、音曲、舞の拍子は、みなそへ(添)ものなり。音曲を體にして、拍子のうち物をば用なりと知るべし。このうち、物、つづみ(鼓)、太鼓等の藝人、拍子を本にうちてゆくと知は、邪路に入所也。拍子の役人は、舞曲御曲を本とし、舞曲音曲の役人は、拍子を本とすべし。かくのごとくにてこそ、ゆづう(融通)して、共行同心の曲體にては、あるべけれ。およそ拍子は、八拍子なり。あいのひやうしは、なくてもある也。本拍子の四、とは子拍子、たは大拍子、とは二拍子、とは三拍子と名目す。あいの拍子とはかさね(重ね)拍子、たは一拍子、とは四拍子、已上八拍子也。この外、拍子の名目、亂(乱)聲(らんじゃう)、はや(早拍子)、さがり(下)は(端)に、此拍子あり。当流のはたらき、能の拍子、別紙これあり、拍子は、ただ序破急を知るべし。序は一段、破は三段、急は一段にさだめたり。されば破のながきが、舞歌ともによき(善)なり。きう(急)をながく心得たるは、急に

てはなきなり。のびじかに(短)うたひうたひて、とむるところ、きう(急)とするべし。返々、きうがばやくくれば、きうにならぬ所を知るべきなり。たとへば、花はさく(咲)が序也、七日のさかりは破也、散るは急也。ちることがながかるべくは、散をばおしむ(惜)べからず。きうは、すみやかなるをきうと、心得べきなり。

大かた、拍子の心ね、かくのごとくなるべし。

さう(早)歌におす(押す)拍子あり、当流にもおす(押す)心ねあり、是等は皆口伝あるべし。鼓にしらべ(調)のひゃうし、これ同じ。爰(ここに)程拍子を知る事、極秘也。

#### 一、四性の事

(平、上、去、入)の四正なり。去入性は下手のこのむところなり

「悦(よろこび)をのべし、君が代の(去)、すぐなるみちをあらはす(入)」のがのじなり。すぐにいふべき性をおとすなり、おとすは入性なり。

おとすがわろきぞといへば、あぐる、去性に又なるなり。正路のすぐなる性を知るべきなり、平上よし、去入わろし。

#### 一、聲懸の事

是は横豎也。わう(横)に云うところを、豎にいひ、豎に云うべきところを、横にいふはわろし。律をば豎にいひ、呂をば横にいふべし。大かた、かくのごとし。

又、相音とてあり。是は横豎たれる(足)聲也。下くせまい(曲舞)をば、横にいひて、そのうち曲にしたがひ(従い)て、豎の心根もあるべし。さて、なにのなににしてとあぐる所、相音にいふべし。それより曲にしたがせひ、豎にもかかり、横にもうつるべし。呂律横豎を心得て、うたふべし。

一、二字一曲の秘伝あり、是は口伝なり。此曲、当流におきて、とりわききぼ(規模)なり。大かた、二字を一曲にうたふところなり。甘節に似たりといへども、甘節は興ある一節なり、是は惣體にうち散てある節也。多分、人の言所、おなじやうなれども、それにてはなきなり。申さば、やすき(安)事なるを、ならはざれば(習)、みちなきゆへに、知らざる也、是によって秘する也。

およそ在所をささば、「あまさかる、ひな微視なりし、御すまゐ、思いづるも、かたじけなや」のかると「なりし」の「なり」との二文字なり。ただ、二字に書きたるを、よむ(讀)やふに、うたふべし。別に口伝あるべしなり。たとへば、釣針のごとくいうべし。

一、無智味水の事、舞歌についての大事也。人には五味の好味あり。にがきをこのむものあり、からき(辛)をこのむものあり、あまき(甘)をこのむものあり。色々しなじなの好物かはれるものなり。此五味といふもの、本来一水より起これり、水味さらにさだまれるあぢなし。しかれども、このみにしたがひて(従)、五味をくわふ。されば、本来無味の味はひを知るべし。舞歌もかくのごとし。一味に重するところあれば、きらふものあり、好者あり、同心ならず。水なるところを、舞味、詠味にもて

ば、重せずして初認の心にかなふ(叶)。しかも、その主人のこのみによりて、又有る味をまじうる(交)事、本、水のうるほひだにあれば、五味をなす事、こころのままにて、やすかるべし。さる程に、重せずして、面白き感味になるなり。

舞の風味、音曲の詠味も、そのすがたに重せざれば、水のながれにしたがふごとし。然ば、體、味、ともに一水の徳をそなふる事、かくのごとし。

水はうつわ(器)物によりて、一方圓のかたちをなす。五味のあぢはひをなす。

人のこのみ、能の體によりて、體味の感をなさん事、わずらひ(煩)あるべからず。此一水より、皮肉骨の三曲もおこれば、山河大地、是非草木、萬佛、皆此水體なり。爰(ここに)、六輪一露と云習道の一巻を作る、是又水輪の形なり。一露はすなはち一水の初、利劍勢骨也。然ば、ただ此三曲よりならひ入事、かんようぞと知べしなり。水はながるるをもて體とし、無味をもていのち(命)とす。音曲は、吟詠くだれるをながれとし、重せざるを無味とす。舞いは序破急に、うつくしく、順路にうつるを、ながれとし、すがた重せざるを、無味とす、皆以、かくのこどし。水色(みずのいろ)又空なり、うつす(映)にしたがひて、其色を表す、其色もまたとどまる事なし。「應無所住、而生其心(おうむしょじゅうにしょうごしん)、(應に住するところはなく、その心を生ずという禪語)」也、秘すべき秘すべき、あなかしこあなかしこ、千金傳莫なり。」

- 一、此一水、稽古の入門より、初心、中年の分位までは、一水諸味と心う(得)べし。又、其藝體も、一水諸味なり。上々の位にのぼりぬれば、諸味一水となる、是則ち流通自在になれば、其時の機に應し、好にしたがふゆへに、まづあじはひとして、無相無爲(読み、むそうむい意味、特定の相を持たないこと)の水味をうづめり(埋)。然ば、諸味一水と心得べし。
- 一、此道に年来の稽古至々て、向去却来し、無上の果にのぼらば(昇)、なに(何)かくらかる(暗かる)べきなれども、達者にまぎれて(紛)、俗をわすれ(忘)、おぼえず(憶)急にあらく(粗)なりて、闌曲のくま(隈)ある事あるべし。是は猶も、おろかなる所。無上の位、およばざるかと思う所に、上代唐物等の繪(絵)さんのたぐひ(類)にも、すでに名を發(発)しぬれども、其うちにおきても、わるき所かならずある也。されども、眼精を開ところ、こんせぬ(混せぬ)によりて、わるきところもかくるるなるべし。さりながら、それに付ても、返々闇所のなきやうに、いかにもいかにもたしなむ(嗜む)べし。是大かた、当場の機に應し、心もなく急にたちふるまう所にあるべし。無心の感は、至上の位なり、それは別の事也。いづくまでも、心のそはん(添)事、肝要なるべし。是則ち、明曲にして、いささかのくまもなき、月のごとくなるべし。自然の浮雲に、かげ(影)しばしかくるといへども、月の光はさはり(障り)あるべからず。たとひ、曲すこしまぎるる風體、急にありとも、心だにあれば、くもりなき月のごとくにて、中々に、しばらくの浮き雲は、たへなる(妙なる)景縁となる事もあるべ

し。(世阿弥の所謂、闌位かとの書き込み)。返々、闇所、明曲のわけめ(分)をしるべし。音曲にも、清曲、濁曲のあるがごとし。

- 一、程拍子の事、萬事ほどよりなすべきなり。ひゃうしよりするは、ちいさき也。天地未分は、ほどなり。開闢はひゃうしなり、萬物此ほどよりおこる所なるべし。又ほどの内に、ひゃうしあり。拍子のうちにほどある事を知るべし。何事も、所作に物はかなきところのあるが、面白き所也。それ又、此ほどに殊にあるべし。委く(くはしく)は口伝。
- 一、それ正直を性とし、慈悲を心とし、天地を父母とする時は、四海太平なり、萬道ここにお(を)さまるべし。又、習道の儀に正仍(しょうじょう)の二あり、機にしたがって法をとく(説く)、其器により(依)て人によるべからず。その物に似相(にあい)て示べき事、眞假一體の方なるべし。此一帖は、誠道の奥蔵、秘秘中の秘也。此心智事、常住不滅の妙花を、一期萬年に持せる、其者成べし。秘すべし、秘すべし。

長祿四年十一月十一日

金春竹田秦翁(花押)

金春八郎秦安照(花押)

## 六、「至道要抄」

外題は至道要抄とあれど、中には別に無し。表紙うらには、「六月十八日、稲荷文殊堂、十七日参籠、心中所願皆満足せしむ。山上元三、参詣之願、成就同これ満」と記す。

禅竹の遺書としてこれを考ふれば、応仁元年(1467年)の稲荷山参籠の以前のものか。

本書中の記述は、八音と三學との二つにて、その八音節は、世阿の五音曲に倍加するところあるものとす。

その三學は六輪説を節約したるものとす。

禅竹がこれをもって至道となすは、世阿の未だ言わざる所にして、一家の創構に由ればならん。(末尾には浄土教の西山・深草二流の異解をあげたり。亦、此人の法門上の信證遺憾を知るの料たらんむ、今は割りて、文正応仁記の中に移したり)

### 第一章、 八音

「妙音觀世音、梵御海潮御、勝彼世間音、是故須常念。」

それ申樂歌舞の曲音、色々品々なりと云ども、根本の八音を知るべし。

第一祝言音。第二祝言曲。第三遊曲。第四幽玄音。第五戀慕。第六哀傷。第七闌曲。第八閑曲。

第一祝言音は、をのれ(己)をのれとそなはれる(備)聲の、そのままなる位也。

たとへば、管弦意図竹におきても、吹出す竹の生得の聲、しらべ(調)を出すいと(糸)の

生得の聲あり。

其調子より、次第曲風にうつり行て色々様々の感聲あるべし。宮商上り下て、聲文をなす。

是を音といへり。然らば、宮の聲まづ時の調子より出る聲にて、正しき位也。是を祝言音と心得べし。當(当)道に取ては、いづれと定かたしと雖、し(強)いてこれをさだ(定)めば、祝言、開口なるべし。「孝弟はそれ仁のもとか、本立て道成る」と云へり。

「人、其本みだれて(乱)、未(未)まだ(未)をさまらず」とも云へり。

されば、一切は、其本を知らんこと(知)肝要と見えたり。

神書云「元々元初入、本々本心任」云々。是清浄正直の根本、神慮にかなひ佛法にあへる心なるべし。然らば世上萬の道に於て、何事かもるべきや。

この祝言の音より、次第次第に曲味を知り、色(とり)取りゆくべし。是を音曲の性といへり。たとへば、絹布の地は性也。根本也、色々の文を染めいだすは諸曲の如し。地の性、不定ならば、ふみ(文)をそむる(染)によろしからず(宜)。

舞風は、歌の詠吟より成る體、音の道、ただ是にあるべし。

第二祝言曲は、すでに聲あや(文)をなす位にて、曲にかかれば出息、延曲にて、始下、中上、終下し、圓相順路の曲體にうつる(移)也。然者、祝言音は、治世安楽なり、祝言曲よりは曲妙を知るべし。曲妙をば、たくみ(巧)なるわざ(態)とよめる秘書あり。

此わざのたへ(妙)なる事、まここに萬道の至極なるべし。

第三遊曲は、ゆふらんし(遊覧)、さざめきかけて、柳櫻をこきみだしたる體なり。

花鳥風月の景を、おもしろ(面白)く作り、ふし(節)をつけたるかかり(懸)みだれたらんを、其心を得て、うきうき(浮)とうたふ位なるべし。

第四幽玄音は、無上第一の位也。此ゆふげん、おほく(多く)は人の心得ちがふ(違)うことあり。なすかざり(飾り)ことを(言)をたくみ(巧)、なやみて(悩)、よはき(弱)を幽玄と心得るものあり。然るべからず。およそ、幽玄のことは、佛法、王法、神道につき、更に私あるべからず。

只、肝要は、つよき(強)儀、至て深き遠く、やはらぎて而も物に負けず、とほりたる(通)儀也。金性も幽玄なり、明鏡も幽玄也。劍勢も幽玄なり、石岩も幽玄なり。鬼神もゆふげんなり。眞の鬼神の道いたら(至)らざる時は野干したぬきの仮生まれなれば、それは幽玄の道を知らず。されば異端のばけ(化け)物にて、正體なくなる也。さればかくのごときあらき(粗)ものだにも、まこと(眞)なければ、比興の事也。ましてや、寛なることにおいてをや。

上面ばかりうつくしく(美)、よらめけるは、さき(前)のばけもの(化物)に異なるべからず。然ば、まことの性理を知らざるをば、幽玄とは云べからず。

それ幽玄の数々、天地未分より、幽玄の根本也。然ば天地も幽玄なり、日月、星宿、山海、草木も幽玄也。ふとき(太)はよはく(弱)、細きはつよし(強)。細きはやはらぎ(和)、幽玄の儀、ふとき(太)はあらく(粗)して、而もまたよはし(弱し)。

但し、ふとくして(太)、しかも(而)細き心あるは、幽玄そへる故に、物にま(負)けず。

幽玄そなわれば(備)、太きも、ほそきも、心のままなればなるべし。是はただ、其の幽玄

の所より、大にふとき所も出たる故なり。然らずば、ふときことはあらく、よはきまでなり。

第五戀慕は、思ひ中にあれば(在)、色ほか(外)にあらは(現)るる體なり。此段、心を以て本とす、色心にと(取)れば、色は幽玄の體、心は戀慕の方なるべし。姿うつくしくして(美)、心ふかき、是肝要也。ふかきは聲音の方、智慮の思ひ籠りて、姿かかり(懸)、長たかく、うつくしき、此道の至極、無上の至也。「身質直(しんしつちよく)、意柔軟(いじゅうなん)」とも、法花經に説(とかれ)たり。姿すぐ(直)にただしく(正)して、心にうなん(柔軟)なるは、なさけ(情)思ふかき(深)也。戀慕のもん(文)言をうたふ(謡)、其心になり(化)、入りふかめて、かすかに(幽)うたふ位を、よくあちはひ(味い)知るべし。たとへば、春の花、秋の紅葉花鳥、風月の景縁なるべし。

第六哀傷は、人間のならひ(習い)、恩愛のみち(道)の哀れをつくり、世のはかなきためしに引入れ、かかり(懸)ふし(節)をつけ(付)たるを、心得てうたふこと也。戀慕、哀傷のかはりめ、そのほど(程)大事といへり。諸曲をきはめ(極め)つくして、戀慕のふかさに、猶そめ(染め)まさらん(勝)、あいしやうの色をあらはし、うたはん事、一大事とも云つべし

たとへば、諸木の冬枯に、なりはてたるが如也。是を哀傷のもん(文)の如くに、涙を流し、うれへ(愁)にぐ(具)してうたへば、古體にて俗なるかた(型)なり。れんぼのあはれに、あいしやう(哀傷)の心ふかめても、深むべきころなれども「愛執のあはれは、こひち(戀路)のあはれ」、「哀しやうは、無上のなさけきのあはれ」とは、はたとかはれり。

所詮、たとへ(喩)の如く、ただ枯木の心をうたふべし。

第七闌曲は、たけたる位。「初心即極」年月のたけゆく(闌け行く)如し。然ば、松杉の年へたる(経)すがた、更に餘にこん(混)せず。山風、鹽風にもまれ(揉)、しほれて(萎)、枝葉もまれに、かぶろ(禿)木になる(化)まで、其性位あらはれ、こびたけたる、物の本なるべきや。されば、功成り名遂げたる位也。然に、此位に入ぶせざる不堪の物、たけたけたる位をまなび(學)、我する態(わざ)にてた(闌)くること、返す々、比興とも、中々伝ふに及ばぬ次第也。是はただ、あらく(粗く)こはく(硬く)して、いよいよほんの我しごと(爲事)まで、なほ損する事を知らず。此闌曲に至らんと思はば、よく次第々々に、年来の稽古をつくすべし。くれぐれ、たけたるとは、なにと心得ることやらん。おろかなる(愚かなる)事也。

非を是になし(作)、をかし(可笑)き事も、たけておもしろ(面白)く成し、此性位よき(善)ほどのこう(劫)なるべきや。よくよく思案すべし。

年ふりたる劫をつめる(積める)は、其物々の位、おのつから(自)備われること也。それを、いたらずして似するに、似せたる位は、あらく(粗く)こわし(硬し)、更にうるはしかるべからず。然ば、我本のわざも(態)失する也。一大事、このことなり。する(爲る)ところに従て、ほっする(欲する)所にしたがはん(従)ことを求むるは、猶木に縁って魚をもとむ(求む)る如し」といへり。木によって魚を求めんは、愚かなるまでにて、失あるべからず。

する(爲る)所に従て、ほっせる所に従はん事を求むるは、失あるべし」といへり、是肝要なるや。

第八閑曲、此位みやび(雅)、しづか(閑)に、たけたる性位也。是ぞ、まこと(信)にうるはしき(麗)所ならん。たとへば、吉野、大原、小鹽の名木の、年へて(経て)すくなき(少なき)枝の苔に、花の所々にさきたるに(咲)、雨のそぼふり(降)たるを見る如くなるべし。静にうるはしくして、而もこびたけたる位、尤無上至極の位也。以前の閑位はあらし(粗し)、此閑曲は静也。あらしと雖、根本非情無心の性、あれたる(荒れたる)うちにも、松風、杉風の閑情よりおこり(起)、櫻木の風にみだれたる花のいろ(色)かは、あれて猶感あり。生得あらしき物は、静かなる時あれども、した(下)地あらしきがゆえに、ややともすればあらくなる也。

下地静かなるものは、わざとあらしき事あれども、根本しづかなる故に、ややもすれば静かなり、此わ(分)け目をよくよく知るべし。

野の馬の草につき(食)、いわ(岩)ほの猿のねぶりたるをりを、静かなりと見べしや。

是はただ、あらし(粗き)物の暫く静まりたる也。されば、下地荒くこはき(硬き) 藝人、よきことを學びて、一旦静かに身を作り、心を色とり(取)たるは、猶不足見えて、知る者は比興と見るなり。不知者(知らぬ者)は、是に目を取紛るる也。然ば、静かにうるはしき性位は、わざとあれて(暴) 亂(乱)れたるふせい(風情)、歌舞雨風におきて、應感(応感)殊にあるもの也。中々、閑なる時よりは、猶目耳をおどろかすとは、此位をいへり。

歌道の秘書にも、十體のきはめ(極)、最初幽玄より、次第次第に色々をつく(着)。

無上の極意に至ては、鬼を拉ぐ體、強(強)力體などに至れる位、此性位にあたるべし、全く別なるべからず、よくよく年来稽古、工夫の所なるべし。

## 第二章 三學

当流において、守るべき誠定慧三學事

一、戒行者 身業(しんぎょう)。 是戒べし。

早態。 飛越。 力動鬼。 魔。 法下。 異相。 天狗地狗類。

現世軍者。 ひざかえり。 ひざ拍子。 ひらひらかへりの類。

樂妙假寵の類

二、定着 口業(くぎょう) 禪定觀(觀)念、色心平等に静かなる形也。

一切萬道 有心麗體、是誠に本意なるべし。

三、慧者 意業(いぎょう) 智慧、着秀を破して、物に住せず。

かるがる(軽)、こまかに(細)、やわらぎ(和)、うごき(動)。

たまりて(溜)、而も止まらず。流れて、又速からず。静かにて、遅からず。

深くして浅く。所は顔を先にし、顔は目を先にす。

見るには心を先に資。聞くには身をさきたてよ。

「圓頓(えんとん)中道、一身一念、遍於法界、境智冥合」。是則ち、幽玄至極なり。

それ堅く澄すは位小に、和(やわらぎ)て寛(ゆるや)かなるは位第なり。

十界依正、残るところ無きものや。

色(戒)香(定)美味(慧)、皆悉和合(般若)、中道寛相(法華)。

三曲萬智とは、身幽玄、口幽玄、意幽玄なり。身幽玄は、身成、懸の體相なり。

口幽玄は音曲なり、意幽玄は、曲を含む味わいなり。

然ば此道の稽古の肝要、只この三也。

身の懸かり、そのもの(物)そのものに能く(よく)成伏して(なりふして)、而もうつくしく、厳浄にて、さて云出す音曲、其位の音勢いにて、心幽玄の曲味、深く理をこめ、餘情外に匂ひみち(満)影そはん事、無上上果の位也。然ば、此三曲をたしなむ(嗜)べし。たとへば、三曲は、一大明鏡の面の如し、かけそん(損)する所なき形は、にうわにして(柔和にして)、見にくき所なし。此一輪(圓相也)めぐりめぐせりて、更に一息の間断なき。

是を壽豎住像破空の六輪といへども、ただ一輪の位、明鏡の精力、劍位となる。(中略)

### 第三章 三曲三輪

第一色體は、質直にしてうつくしき(美)、これを壽輪の身幽玄といふなり。

第二口業は、音感幽玄にうつくしく、ひえ(冷え)のぼりて(昇)すむ(澄む)位。

豎輪の清曲となる。

第三意業の柔軟とは、其心一向に理り深き遠慮なり。然ば、其位に安治坐段(あんちぎだん)す、是を住輪といふ。その品々の仁(人)體に成るは像輪なり。其位、次第次第にた(闌)けて、順逆如意なるを破輪といふ。至り至りて空無相(くうむそう)なる位を、空輪といふ。

さて、此上に舞歌を成す、此道の肝要、中道なり、上三輪は、即是成。

質直にても厳しきを、舞音の壽といふ。位高きを豎といふ。能く治まり成就するを住と云ふ・心のままに其のものものになるを、像といふ。闌閑如意なるを、破といふ。少成を空と云、此等の精神一心なるを性劍(しょうけん)と云。(中略)

三曲は、壽豎住の上三輪にして、是則、戒定慧の三學、圓頓妙法の色香美味なり。

此道にしては、體、音、舞の三に取るべし。皆悉具足(かいしつぐそく)、擣籥和合(とうしわごう。)擣籥はわりくだきつもるにて、和合は中道實相也。わりくだきは空(くう)、こまかに抹するは假(け)にして、和合は中道とかや。是等の心をこめて、ただ肝要は身の懸、體相をよくし、次に音曲をよくし、次に心をよく深むるなり。此次第を心、音、身体と次第すべし。見聞空は、身、音、心と見聞也。只此三より舞風に成る所、無上上果の幽玄至極也。然ば「體音舞、色香味」と知るべし、此心をとるを(取)精(精)劍の一露と云うなり。

### 第四章、三輪九品

夫(それ)、神楽猿楽、有道(うどう)の藝人において、上古よりこのかた名を得るともがら(輩)に至りては、無上上果の位、幽玄のさかひ(境)を出でたる事なし。このゆふげんの格に入らざるは、貴人高位の御目におよぼす(及)事、又是なし。おのづから(自然)此位に入れる人、名高き御目にかかり、面目をほどこせ(施)り。しかりと云えども、近年道のさた(沙汰)なく、おお(雄々)しく成りてきて(来て)、貴人高位の御目も、まぎれある世のにごり(濁)にや、あらあら(粗)こはこは(硬)しき風のみ、興ある體になりゆくによりて、いよいよ此道の玉をみ

がき花をかざすたしなみ、すたれ(廢)ゆく事。なげかわしき(嘆)こと、何事か、是にし(知)かんや。是によって、わたくし(私)に稽古の道を案するに、天地陰陽、日月星宿、神祇佛法、人王の道、一切の人のしわざに至るまで、佛性そなわらざる(備)ことなければ、是又幽玄の境なり。されども、佛性をしらざれば凡夫となり、幽玄のさかひをわきまえざれば、俗にいやすく(卑)なりて、高位に上る事なし。

天台は色心(しきしん)妙法蓮華經とひらけ(開け)て、一念三千の功德、十界依正(じっかいいしょう)、萬々たり。

然者、阿鼻(あび)の依正は極聖(ごくしょう)の自身に處し、びる(毘廬)の身土(しんど)は凡下の一念にこえずといへり。眞言(しんごん)は三密ゆか(瑜加)の觀(観)念、即身成佛し、淨土は「乗彼眼力、定得往生」にて、即便往生(そくべんおうじょう)、安心決定す。

かくのごとく、寛容根本に歸するを以て、證所とせり。当道は、三體よりはじめ(始め)て、十體をなす(成)。達人にいたりても、まことに上代は、みな幽玄の位にいれたり。十界にも地獄、餓鬼、ちくしょう(生)は、殊にあらく(暴)、こはくして(硬)、卑く、恐ろしきにより、三惡道とておそるべき(怖)道なりといへども、十界悉具の體性なれば、佛界にそなはる(備)所也。たとひ、ぢごくの鬼神體、がきの體に比して、亡魂(ぼうこん)、さいどう(碎動)風鬼にても、又畜生の獅子、野干(やかん)のかたちをなす(作)とも、根源幽玄よりそたちたる(育ちたる)色心におきて(於)、ふつ(佛)といやすく(卑しく)あらく(粗く)こはき(硬き)すじ(筋)あるべからず。人々具足せる佛性なるべし。おなじく(同)音聲、皆その體、其體といへども性より五臟通用なれば、聲の位ひとし(均)かるべし。

ここに六輪一露の習道に、上三輪をゆふげん(幽玄)の根本とせり。

十體にわたり、異相の體、鬼神をなすとも、上三輪のゆふげん(幽玄)をそなへば、三院佛性を具して、萬徳圓滿の光をはなちて(放)、國土を照し、化度利上(読み、けどりしょう意味、衆生を教え導き、利益をあたえること)の明道なるべし。

これについて、位かいきう(階級)をたて(立て)むに、世阿九品(くぼん)の正位をいやしおかれたり。それについて料簡を加へば、上品三體は、六輪の上三體にあたり、中品は像輪、下品(げぼん)は破輪なり。空輪一露は、無上の果位、無碍自在の解脱、三昧の性位也。

上品上生(じょうぼんじょうしょう)位 妙花風性

性は縁によらざる(因)本體也、本體の縁にあらはるる(現)を位といふべし。

此性位、蟻融(ありとほし)なるべし。

この三輪九品説は、序文及び上上の一品のみにして、八品の階級は缺(かけ)たり、逸失せるものに似たり。世阿の九品説は、十六部集中「九位次第」と題する小冊子に見ゆるごとし。上上の品と定められし蟻融は、即、蟻通ならむ。

此三輪九品説は「五音次第」の冊中に混入しありしを、今便宜の為に移して至道要抄の中に置き、その第四章となす。

### 参考文献・資料

吉田東伍 校註, 池内信嘉 編『禪竹集:能楽古典』能楽会、大正4年  
国立国会図書館デジタルコレクションより参考に作成。

「五音次第」「歌舞髓脳記」「六輪一露之記」「拾玉得花」「五音三曲集」「至道要抄」